

児玉町文化財調査報告書 第7集

真鏡寺後遺跡Ⅰ

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書5

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第7集

真^{しん}鏡^{きやう}寺^じ後^{うしろ}遺跡Ⅰ

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書5

1987

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

昔を偲ぶにつけ、何故かしらこの現代もまた特別の時代ではないかと思えてくるから不思議です。例えば、少し前までは比較的珍しかった自動車も、近ごろは児玉町においてさえ通勤時間帯ともなると小規模ながら渋滞もみられるようです。また、戦前に少年時代を過ごした我々にとって、最近の物品の消費には、ただ驚くばかりです。おそらく人類の歴史の中で、未だ使用に耐える器物を捨ててしまうということは大変珍しいことで現代を象徴する事柄と言えましょう。この現代の目まぐるしい交通と消費活動の発達によって、わが児玉町も「現代」の問題に直面し、文化財と歴史との共存がいかに難しいかを痛感させられる、今日この頃です。

しかしながら、歴史とは、このような過去からの伝統が保存的に実現されるものにほかならないものですから、「文化財の町」といっても過言ではない、児玉町の文化財の保護活用もまた我々の責務と考え、その保存に努力して参ったわけです。このたびも真鏡寺後遺跡の保存の措置につきまして、関係機関等と再三の協議を重ね、現状で保存できるよう要望してまいりました。しかし、現状での保存は難しいとのこと、やむをえず万全の調査をもって「記録」という形で後世に伝えることになったものです。

このささやかな報告書が、町民の皆様や、教育・研究にたずさわる皆様の、御参考となりえるならば幸甚に存じます。私どもも、地域に根ざした発展とは何かを問いつつ、「文化財の町」の名に恥じないよう、社会教育に努力してゆく所存であり、皆様のこれまで以上の御協力と御叱正を、衷心より念願する次第であります。

昭和62年2月26日

児玉町教育委員会教育長

石 井 栄 一

例 言

1. 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字真鏡寺後に所在する真鏡寺後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農道改良舗装工事に先立つ児玉町内遺跡群保存事業として、昭和57年度に児玉町教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告書に要した経費は、町費・国庫補助金・および県費補助金（埼玉県教育委員会）である。
4. 本書の編集は、整理参加者の協力を得て鈴木徳雄が行い、各執筆分担については各文末に記した。
5. 発掘調査および本書作成にあたって下記の方々や機関から御助言・ご協力を賜った。（順不同、敬称略）
赤熊浩一、井上肇、石岡憲雄、梅沢太久夫、岡本幸男、柿沼幹夫、金子彰男、金子真土、雄岡恵一、坂本和俊、笹森健一、篠崎 潔、清水守雄、清水保男、志村 哲、鈴木秀雄、菅谷浩之、外尾常人、高橋一夫、田島三郎、田村誠、利根川章彦、長瀧歳康、中村倉司、野口泰宣、長谷川勇、増田一裕、矢内 勲、山口逸弘、埼玉県教育局文化財保護課、児玉郡市文化財担当者会
6. 本書作成の主な作業分担は、次のとおりである。
遺構原図操作・製図（尾内俊彦、本間桂吉）、図面調整（永尾順一、田口照代、前田明子）、地図作成（徳山寿樹）、写真（永尾 順一）
7. 本書は、遺構を中心に編集したもので、遺物等については、別途『真鏡寺後遺跡Ⅱ』として刊行の予定である。

目 次

序

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 遺跡の概要	4
1. 遺跡の概要	4
2. 基本層序	4
第Ⅳ章 検出遺構の概要	10
1. 竪穴住居址	10
2. 溝状遺構	38
3. 土壇	39
第Ⅴ章 真鏡寺後遺跡の提起する問題	45
―土器住居内遺棄行為について―	
引用・参考文献	47

写真図版

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

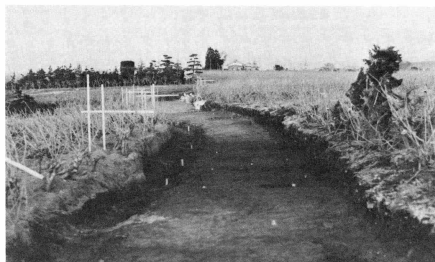
調査に至る経過

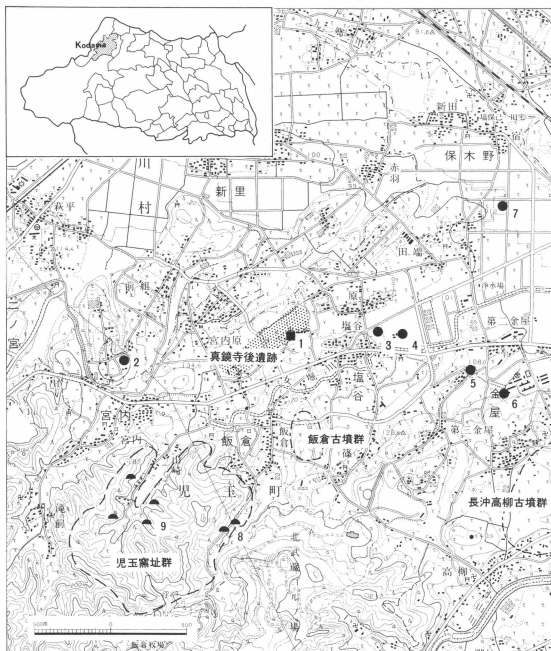
昭和57年度農道改良舗装工事に伴って、埋蔵文化財の所在にかかる事前協議が、児玉町産業課から昭和56年12月に町教育委員会にあった。この所在確認にかかる区域は、『埼玉県遺跡地図』児玉町№107に相当しており、町教育委員会の職員が直ちに現地を踏査したところ、計画路線の全線にわたって土器片等の遺物が散布していることが確認された。町教育委員会では、産業課にこの旨を回答し保存の措置について協議したところ、この路線の工事実施については地元からの要求がつよく、現状での保存が難しいことから工事に先立つ事前の発掘調査を実施して記録保存する措置を取るようになった。そこで、昭和57年度の文化財保存事業費の補助金の申請を行い、発掘調査を実施することになった。補助金の確定通知が、教文第1088号であった。

調査の経過

発掘調査は、路線の西隅から重機によって表土を除去し、その残土を処理しながら遺構の平面形態を確認した。それと共に、国土地理座標を二等三角点からひき、真北にあわせた4m×4mのグリッドを設定した。遺構の確認によって本遺跡は、古墳時代中・後期を中心とする時期に営まれた集落址であることが判明した。遺構の調査は、発掘区が道路幅の4mに限定されているため、全体を調査できるものが少なく、調査区の壁で土層観察を行うのを原則として実施したものである。なお、調査は、昭和57年12月9日から昭和58年2月21日まで実施し、現地での工程を終了した。

(事務局)





第1図 真鏡寺後遺及び周辺主要遺跡

1. 真鏡寺館址	6. 倉林後遺跡(利根川他・1981)
2. 前組羽根倉遺跡(坂本他・1986)	7. 十二天遺跡(鈴木他・1981)
3. ミカド西遺跡(鈴木他・1981)	8. 飯倉窯址
4. ミカド遺跡(坂本・1981)	9. 金草窯址(昼間・1982)
5. 枇杷橋遺跡(駒宮他・1973)	

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字真鏡寺後に所在し、『埼玉県遺跡地図』の児玉町-No.107に相当する。

地理的環境

本遺跡周辺は、三波川変成帯の結晶片岩を基盤とする上武山地と、八王子―高崎構造線を境にそれに接して東に延びる第三紀層を基盤とする児玉丘陵によって構成されている。また、この丘陵下には神流川によって形成された洪積扇状地である本庄台地があり、さらにこの台地面は上武山地域から流れ出る河川によって開析され、沖積地が形成されている。

遺跡は、この児玉丘陵の一支丘上に存在し、標高は、約106mから126mを測る。この遺跡をのせる丘陵下には、その北側に式内社金鑽神社付近にその源を発する金鑽川、また南側には児玉町大字宮内地内の上武山地域から流出する赤根川が流下し、本遺跡付近は、おおむねこの赤根川水系と金鑽川水系の分水点に相当している。本遺跡は、南側に赤根川を臨み、本遺跡を乗せる丘陵下に、この赤根川によって開析された沖積地が西方に展開している。しかし、この沖積地は比較的狭く、また赤根川が運ぶ大量の土砂が堆積しており、水田耕作の可能な面積は広いとはいえない。遺跡の北側には金鑽川水系に属する幅の狭い谷が侵入し、丘陵下の湧水で水田を灌漑することができる。しかし、これもまた狭隘な谷戸であり、大きな可耕面積を望むことはできない。したがって、本遺跡の生産の基盤は、これらの沖積地及び丘陵部にあったことが推定される。

歴史的環境

本遺跡の周辺には、各時期の遺跡が存在しており、弥生時代の遺跡には前組羽根倉遺跡（坂本他、1986）、古墳時代前期では小形珠文鏡を出土した前組羽根倉遺跡をはじめ、ミカド西遺跡等（鈴木他、1981）等がある。古墳時代中期の遺跡には、倉林後遺跡（利根川他、1981）、枇杷橋遺跡（駒宮他、1973）また、後期では、ミカド遺跡（坂本、1981）等がある。本遺跡周辺の古墳には赤根川を挟んだ南側には飯倉古墳群を臨み、南東約1.8kmには、長沖古墳群（菅谷他、1980）が存在している。また、奈良・平安時代の遺跡には、十二天遺跡（鈴木他、1981）、枇杷橋遺跡（駒宮他、1973）等がありさらに本遺跡の南西には、8世紀前半代に比定される複弁蓮華文軒丸瓦や国分寺献納瓦を出土している金草窯址（昼間、1982）、飯倉窯址をはじめとする児玉窯址群がある。

本遺跡の南側に接して土塁や空堀が存在しているが、これは本遺跡の第2次第3次調査（注1）で中世の館址に伴うものであることが確認され「真鏡寺館址」と呼称しているものである。（鈴木徳雄）

注1) 真鏡寺後遺跡は、今回の第1次調査の地点をA地点、第2次調査の地点をB地点、第3次調査の地点をC地点とそれぞれ呼称した。

第Ⅲ章 遺跡の概要

1. 遺跡の概要

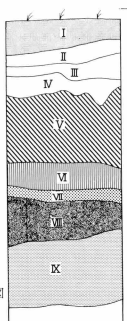
本遺跡は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字真鏡寺後を中心とする、丘陵上に存在し、その小字名から真鏡寺後遺跡と呼称する。真鏡寺後遺跡は、約125000㎡の広範囲に広がっており、調査地点毎にそれぞれ、A・B・C地点と呼称し、今回の報告はこの内のA地点のものである。本遺跡（A地点）の発掘調査は、幅約4m、延長377mの面積約1445.6㎡について行った。

検出遺構

この調査によって検出された遺構は、縄文時代前期住居跡2軒、弥生時代後期住居跡2軒、古墳時代中期住居跡13軒、古墳時代後期住居跡9軒の計26軒の住居跡を始め、土壇28基、溝状遺構3条、その他がある。なお、本遺跡の調査にあたり、便宜的に調査区をⅠ～Ⅳの4区に分けて実施した。

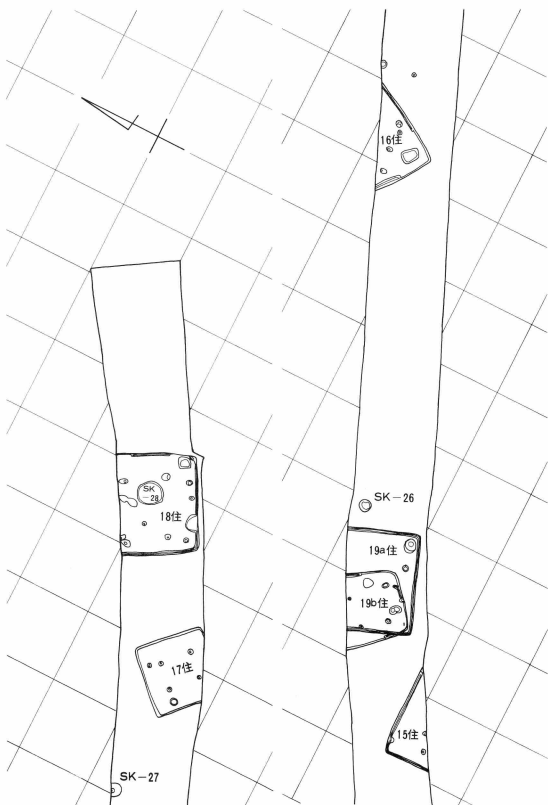
本遺跡から出土した遺物は、縄文土器（諸磯C式、十三菩提式、安行2式）、弥生土器（樽式）、土師器（和泉式、鬼高Ⅱ式）、須恵器（第Ⅱ型式）、鉄斧（鬼高期）、石製模造品（和泉～鬼高期）、その他があり、和泉・鬼高期の遺物が主体である。

2. 基本層序

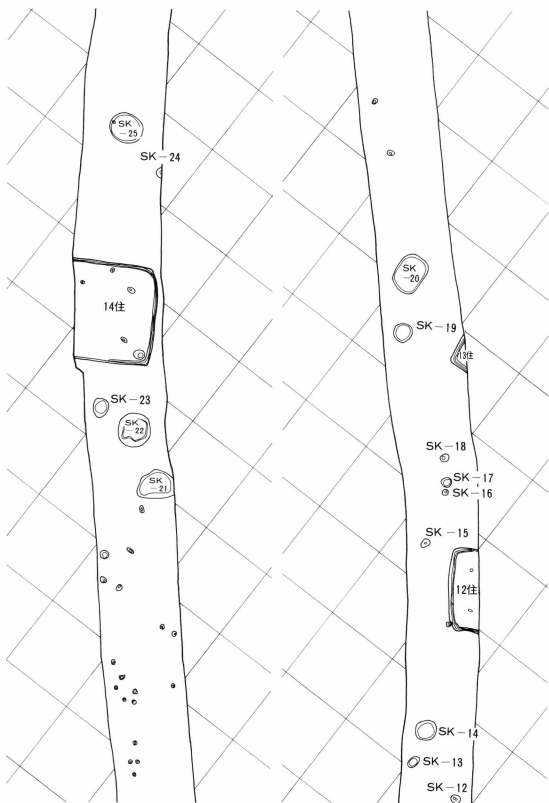


第2図
土層柱状図

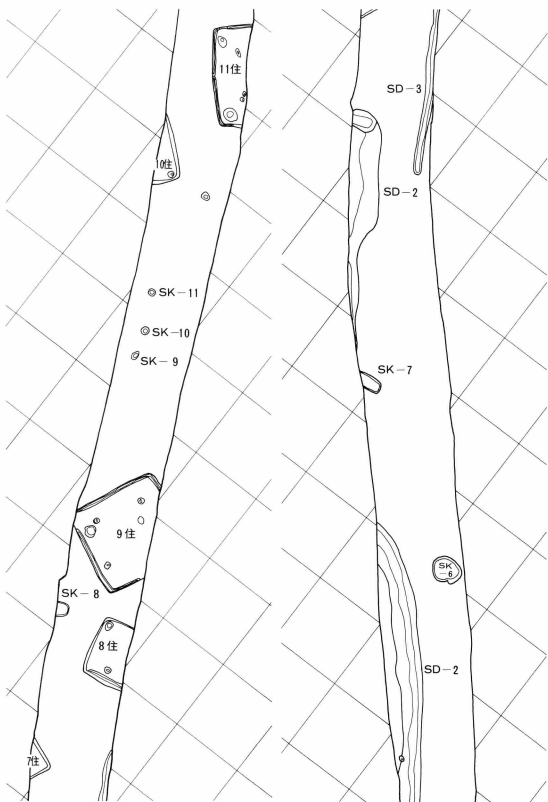
遺跡の基本土層は、礫混じりの粘質土層→褐色粘質土層→橙褐色テフラ層→暗褐色ローム層→黄褐色ローム層→黒色土層→耕作土層（表土層）の順に堆積しており、基本的には児玉地域に一般的な層序をなしている（第2図）。耕作は、黒色土層から黄褐色ローム層上部に達しているが、遺構はそれぞれローム層を切り込んで構築されており、概して遺構の保存は良い。



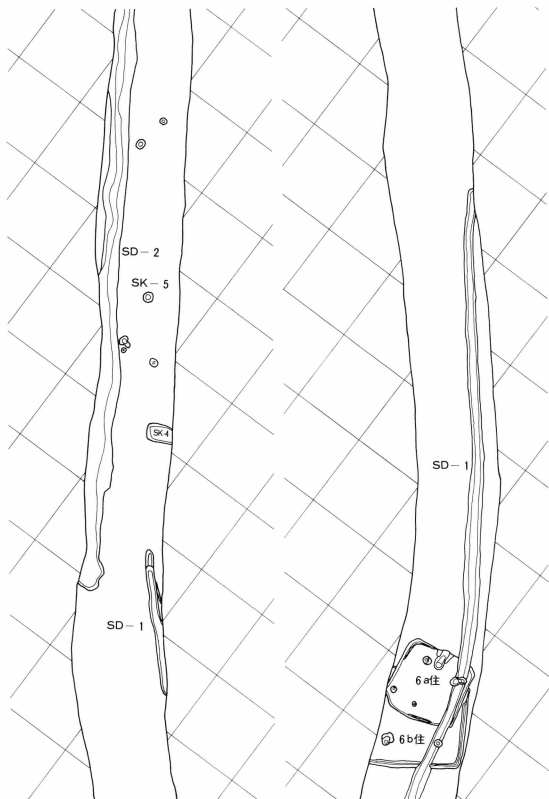
第3図 真鏡寺後遺跡 全測図(1)



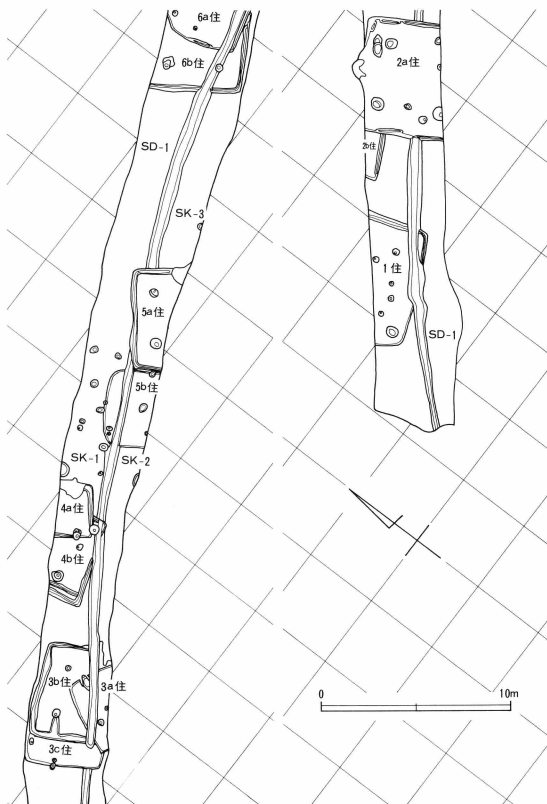
第4図 真鏡寺後遺跡 全測図(2)



第5図 真鏡寺後遺跡 全測図(3)



第6図 真鏡寺後遺跡 全測図(4)



第7図 真鏡寺後遺跡 全測図(5)

第Ⅳ章 検出遺構の概要

1. 竪穴住居址

第1号住居址（第8図・図版2）

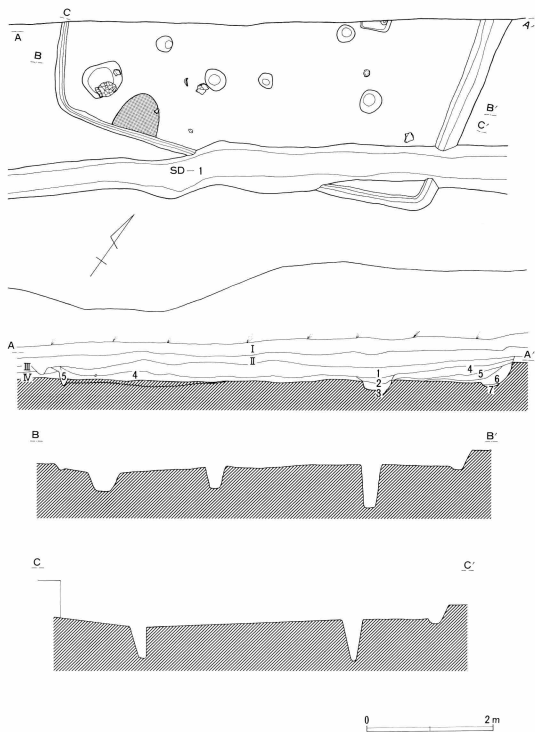
本址は、調査区の西端にあり、西側にやや傾斜をもつ地点に構築されている。本址の西側は、壁の一部が耕作によって削平され、また南側は溝状遺構によって攪乱されている。規模は、東西6.6m、南北については不明である。主軸方向は、N-25°-Wをとる。壁高は、東側で31cm、平均で20.5cmを測る。壁溝は、全体に存在していた可能性が高いと言えるが、攪乱のため東壁下と南壁下の一部等に認められた。床面の状態は、比較的良好であり、主柱穴は、2本検出されており、4本柱穴の構造であると思われる。貯蔵穴は、南西コーナー付近で検出され、鬼高式の甕の完形品が出土している。カマドは、その大半が破壊されているが、その底面の焼土面が南壁中央に検出され、カマドの存在が確認された。また、床面直上から、鉄斧が出土していることは特筆されよう。

第2号住居址（第9・10・12図・図版3・4）

本址は、2軒の重複が認められ、新しい方を2a住、古い方を2b住と各々呼称する。

2a住は、住居の南側が調査区外にかかり全体の形状は明らかではない。規模は、東西5.9m、南北については不明である。主軸方向は、N-32°-Wをとる。壁高は、21.5cm～42.5cm、平均34cmを測り、その壁下に壁溝が断続的に認められる。床面の状態は、概して良好であるが、西側はやや軟弱である。主柱穴は3本検出されおそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。カマドは、北壁に付設され、調査範囲内で煙道部を確認することができたためその大半を調査し得たものと考えられる。しかし、住居の北壁自体が調査区外にかかり、カマドの全貌を明らかにし得たとは言えない。貯蔵穴は、カマドの右側（東側）にあり、坏および甕の完形品が底面より浮いた状態で検出されている。そのほか出土遺物には、鬼高式の甕がカマドの燃焼部に落ち込んだような状態で検出されているのを始め、完形品が多く検出され、これらがカマドおよびカマドの右側にあたかも設置したような状態で分布していることは注目されよう。

2b住は、住居の東半部を2a住に切られ、さらに北半を調査区外にとるため全体の規模は明らかではない。主軸方向は、N-25°-Wをとる。壁高は、22.5cm～45cm、平均32.5cmを測り、壁溝は一部に認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、不明瞭でありその構造についても明らかにし得なかつ



第 8 图 第 1 号住居址

1号住居址 土層説明

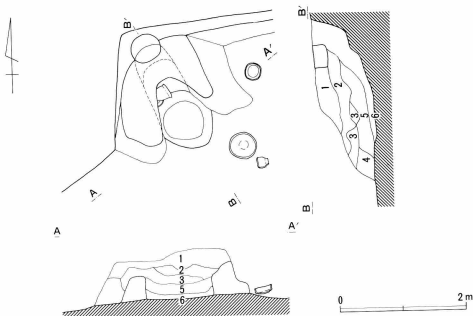
- 1層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を少量、均質に含む。しまりは強く、粘性は弱い。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を均質に少量含む。しまりが強く、粘性は弱い。
- 3層 明褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。不均質でしまりが弱い。
- 4層 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、ローム粒子・白色粒子を均質に含む。しまりは強い。
- 5層 褐色土 径3～5cmのロームブロック・ローム粒子を多量に、白色粒子を少量含む。不均質でしまりは強い。
- 6層 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子・白色粒子を不均質に含む、しまりは弱い。
- 7層 明褐色土 ローム粒子・ロームブロックを不均質、多量に含む、しまりは弱い。

2a号住居址 土層説明

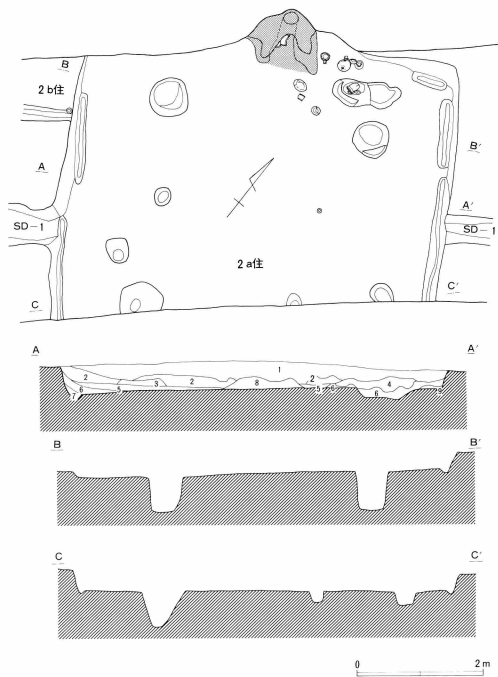
- 1層 暗褐色土 ローム粒子を均一に、径3～5mmのロームブロック及び焼土粒子、炭化粒子を少量含む。
粘性やや有りしまりが無い。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子、径2～3cmのロームブロックを多量に含む。粘性無くしまりも無い。
- 3層 黒褐色土 炭化物・焼土粒子を多量に含む。粘性無くしまりも無い。
- 4層 黒褐色土 炭化粒子及び炭化物を多量に含む。粘性無くしまりも無い。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。粘性に富みしまりが無い。
- 6層 黄褐色土 径5cm程度のロームブロックを多量に含む。粘性に富みしまりを有する。
- 7層 黄褐色土 ロームブロック
- 8層 暗褐色土 焼土粒子及び炭化物を多量に含む、ローム粒子・粘土粒子を少量含む。粘性しまり無し。

2a号住居址カマド 土層説明

- 1層 明黄灰色土 径1～2mmの粘土粒子、白色粒子を多量に含む。粘性に富みしまり有り。
- 2層 暗黄灰色土 粘土粒子、焼土粒子を均一に含む。粘性に富みしまりはない。
- 3層 灰白色粘土 粘土層
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に、粘土粒子、焼土粒子を微量含む。粘性しまり共ない。
- 5層 赤褐色土 焼土層
- 6層 暗赤褐色土 焼土粒子を多量に、炭化粒子、ローム粒子を微量含む。粘性に富みしまりを有する。



第9図 第2a号住居址カマド



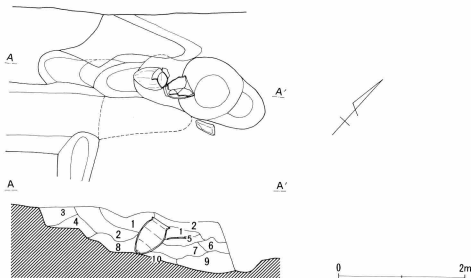
第10図 第2号住居址

2b号住居址 土層説明

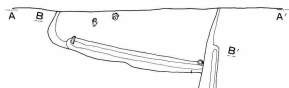
- | | | |
|----|-------|---------------------------------|
| 1層 | 明黒褐色土 | わずかにローム粒子を含む。均質でしまりがある。 |
| 2層 | 明黒褐色土 | ロームが濁点状に含まれる。均質で1層よりもしまり明るい。 |
| 3層 | 明黒褐色土 | ロームが斑点状に含まれる。均質で2層よりもしまり暗い。 |
| 4層 | 褐色土 | ロームブロックが斑点状に含まれる。不均質でしまりが無い。 |
| 5層 | 黒褐色土 | 径2cm程のローム粒が斑点状に含まれる。不均質でしまりが無い。 |
| 6層 | 褐色土 | 径5cm程のロームブロックを含む。 |

3a・3b号住居址 土層説明

- | | | |
|-----|-------|---------------------------------|
| 1層 | 黒褐色土 | ローム風化ブロックを斑点状に含む。均質で粘性ややあり。 |
| 2層 | 暗茶褐色土 | 1層に類似するがロームブロックを多く含みより粘性が高い。 |
| 3層 | 暗褐色土 | 風化粘土粒子を含み軟質である。 |
| 4層 | 暗褐色土 | 1層に類似するが焼土粒子等を含む。やや不均質である。 |
| 5層 | 暗褐色土 | ハードロームブロックを含む。不均質で軟質である。 |
| 6層 | 黒褐色土 | 焼土粒子を多量に含む。上面は若干硬化している。 |
| 7層 | 褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを含む。不均質で軟質である。 |
| 8層 | 褐色土 | ローム風化粒子を主体とする。均質で粘性ややあり。 |
| 9層 | 褐色土 | ローム粒子・ロームブロックを主体とする。不均質だがしまり良い。 |
| 10層 | 暗茶褐色土 | 粘土粒子と小礫を多量に含む。硬質である。 |
| 11層 | 黒褐色土 | 炭化物・焼土粒子・粘土粒子を含む。硬質である。 |
| 12層 | 褐色土 | 9層に類似するが、粘土粒子を含む。 |
| 13層 | 褐色土 | 9層に類似するが、やや暗い。 |

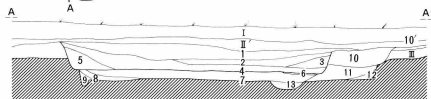
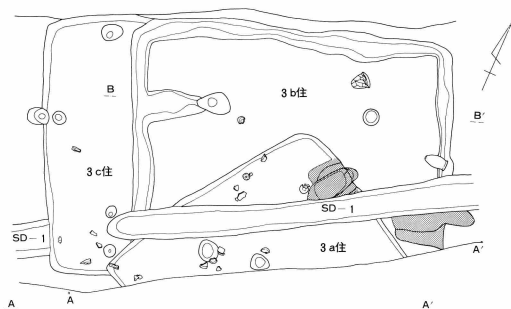
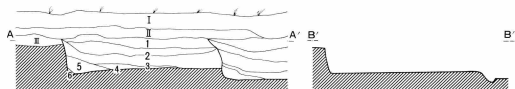


第11図 第3b号住居址カマド



第12图

第2号住居址



第13图 第3号住居址

った。カマドおよび炉址は、検出されていない。遺物は、小破片および細片のみの出土であった。

第3号住居址（第11・13図・図版5・6）

本址は、3軒の重複が認められ、新しい方から3a住、3b住、3c住と各々呼称する。

3a住は、住居の南側が調査区外にかかり全体の規模は明らかではない。規模は、東西については明らかではないが、南北3.9mを測る。主軸方向は、N-28°-Eをとる。壁高は、12cm~15cm、平均14cmを測り、壁溝が認められる。床面の状態は、概して軟弱である。柱穴は、明確ではなくおそらく無柱穴の構造を有しているものと思われる。カマドは、その大半を調査し得たものの、第1号溝状遺構（SD-1）に切られており、良好な保存状態とは言えない。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、鬼高式土器が出土している。

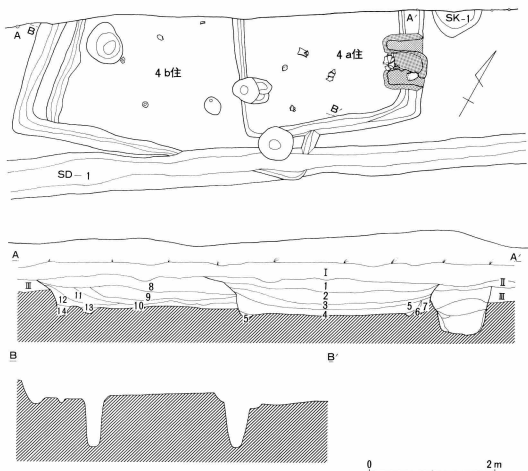
3b住は、住居の中央部を3a住に切られ、かつ南側が調査区外にかかっており全体の規模は明らかではない。規模は、東西5m、南北については不明である。主軸方向は、N-60°-Eをとる。壁高は、10.5cm~46.5cm、平均20cmを測り、壁溝が明瞭に認められ、また主柱穴にかかる間仕切り状の溝が検出された。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は2本検出され、おそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。カマドは、その北半が溝状遺構に切られておりその全貌は明らかではない。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は鬼高式土器および須恵器趣が床面より若干浮いた状態で出土している。

3c住は、住居の東半部を3a住および3b住に切られており全体の規模は明らかではない。規模は、南北4.1m以上である。主軸方向は、N-28°-Wをとる。壁高は、21cm~27cm、平均23.5cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、不明瞭でありその構造についても明らかにし得なかった。また、炉址は検出されていない。遺物は、諸磯式土器の小破片および細片が床面および覆土から、また打製石斧5点、磨石1点が床面から出土している。覆土の状態は、硬質であり壁に近づくにつれてローム質になる。

第4号住居址（第14・15図・図版7）

本址は、2軒の重複が認められ、新しい方から4a住・4b住と各々呼称する。

4a住は、住居の北側が調査区外にかかり全体の規模は明らかではない。規模は、東西2.8m、南北については不明である。主軸方向は、N-36°-Wをとる。壁高は、14cm~19cm、平均16.5cmを測り、壁溝が良好に認められる。床面



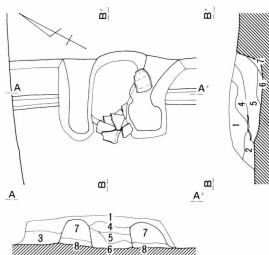
第14図 第4号住居址

4a・b号住居址 土層説明

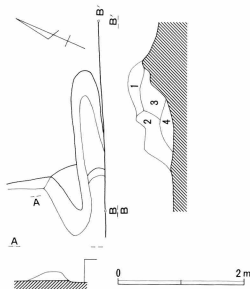
- 1層 暗褐色土 粒子の粗いローム粗を多量に含む。均質である。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子を均一に、炭化粒子を微量含む。均質で1層より緻密である。
- 3層 暗褐色土 ロームブロックを含み粒子が粗い。1～2層より暗い色調を呈する。
- 4層 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。比較的不均質である。1～2層より明るい色調を呈する。
- 5層 褐色土 ロームブロック・ローム粒子を主体とし、風化は進んでいない。斑状である。
- 6層 褐色土 5層に類似するが、色調がより暗い。
- 7層 暗褐色土 ローム粒子を含み粘性である。均質である。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子を含む。やや不均質で軟質である。
- 9層 黒色土 ローム粒子を少量含む。均質緻密である。
- 10層 黒褐色土 9層よりローム粒子の量が多く密度は粗い。やや不均質である。
- 11層 暗褐色土 10層よりローム粒子が多く主体となる。やや粗く不均質である。
- 12層 褐色土 ローム粒子・ロームブロックを主体とする。やや粘質で床面との境界に不連続面をもつ。
- 13層 褐色土 12層に類似するが、上面は張り床されており硬化している。
- 14層 褐色土 12層に類似するが、不均質で軟かい。

3b号住居址カマド 土層説明

- 1層 暗黄褐色土 ローム粒子・粘土粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。
- 2層 灰白色粘土 径5mm程の小石を均一に含む。
- 3層 明褐色土 ローム粒子を微量に含む。粘性しまり共なし。
- 4層 暗褐色土 粘土粒子を多量に、ローム粒子・小石を微量含む。粘性しまり共なし。
- 5層 黒褐色土 炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性に富みしまりがある。
- 6層 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒子を微量に含む。粘性しまり共なし。
- 7層 暗黄褐色土 径1cm程のロームブロックを多量に、焼土粒子を微量含む。粘性しまり共なし。
- 8層 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子・炭化粒子・焼土粒子を均一に含む。粘性なくしまりあり。
- 9層 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを微量に含む。粘性しまり共なし。
- 10層 赤褐色土 焼土層



第15図 第4 a号住居址 カマド



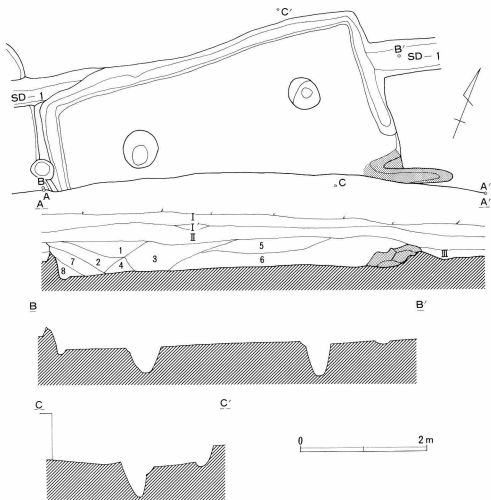
第16図 第5 a号住居址 カマド

4a号住居址カマド 土層説明

- 1層 暗灰色土 緑灰色粘土ブロックを多量に、ローム粒子を少量含む。粘性に富みしまりがある。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。粘性しまり共なし。
- 3層 暗褐色土 ローム粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性しまり共なし。
- 4層 暗赤褐色土 焼土粒子・粘土粒子を均一に含む。粘性に富みしまりがある。
- 5層 橙褐色土 焼土ブロック・粒子を多量に含む。粘性に富みしまりがある。
- 6層 暗褐色土 炭化・焼土・ローム粒子を少量含む。粘性しまり共なし。
- 7層 緑灰色粘土 粘土層
- 8層 暗茶褐色土 径2～3cmのロームブロック、径1～2mmの粘土粒子・ローム粒子を多量に含む。粘性に富みしまりあり。

5a号住居址カマド 土層説明

- 1層 明褐色土 粘土を主体とし、しまりが強く、粘性は、やや弱い。
- 2層 明褐色土 焼土を主体とし、炭化物粒子を少量含む。
- 3層 明褐色土 径1cm程のロームブロックを主体とし、炭化物をブロック状に含む。
- 4層 明褐色土 カマド袖部である。色調は、2層より、やや暗い。

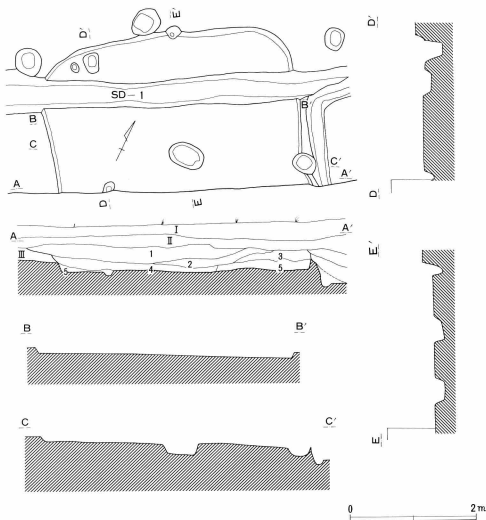


第17図 第5a号住居址

5a号住居址 土層説明

- | | |
|----------|---|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に含む。しまりは強く、粘性は弱い。 |
| 2層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に含み、径2cm程のロームブロックを少量含む。しまり、粘性共になし。 |
| 3層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に、径1～3cm程のロームブロックを少量含む。 |
| 4層 暗褐色土 | ローム粒子、径1cm程のロームブロックを少量含む。色調は3層より明るい。 |
| 5層 明褐色土 | 径1cm程のロームブロック・ローム粒子を少量含む。 |
| 6層 明褐色土 | ローム粒子を均一に、径1～3cm程のロームブロックを少量含む。色調は、1層よりやや明るい。 |
| 7層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に含む、色調は5層よりやや暗く、粘性なくしまりが強い。 |
| 8層 暗黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を主体とする。粘性ありしまり良し。 |

明 度 明 1>3>6>5>4>2>7>8 暗



第18図 第5b号住居址

5b号住居址 土層説明

- | | | |
|----|------|-----------------------------|
| 1層 | 暗褐色土 | ローム粒子・ローム風化土が斑点状に含まれる。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 少量のローム粒子を含む。均質で比較的軟かい。 |
| 3層 | 暗褐色土 | 2層に類似するが、ローム粒子を多く含む。 |
| 4層 | 暗褐色土 | ロームブロックを斑点状やシミ状に含む。1層に似る。 |
| 5層 | 褐色土 | ローム粒子・ローム風化土を主体とし、緻密、硬質である。 |

明 度 明 2 > 1 > 3 > 4 > 5 暗

の状態は、概して良好である。主柱穴は、検出されず、おそらく無柱穴の構造を有しているものと思われる。カマドは、西壁に付設されており、鬼高式の甕が出土しているが、その保存状態は必ずしも良好とは言えない。貯蔵穴は、検出されていない。

4 b 住は、住居の東半部を4 a 住に切られ、かつ北側が調査区外にかかっており全体の規模は明らかではない。規模は、東西4.7m、南北については不明である。主軸方向は、N-13°-Wをとる。壁高は、17.5cm-29cm、平均26cmを測り、壁溝が明瞭に認められ、西半では二条認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、2本検出されおそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。カマドは、検出されておらず、4 a 住に切られているのかも知れない。しかし、遺物には、和泉式土器が出土していることから炉址であった可能性もあろう。

第5号住居址（第16・17・18図・図版8）

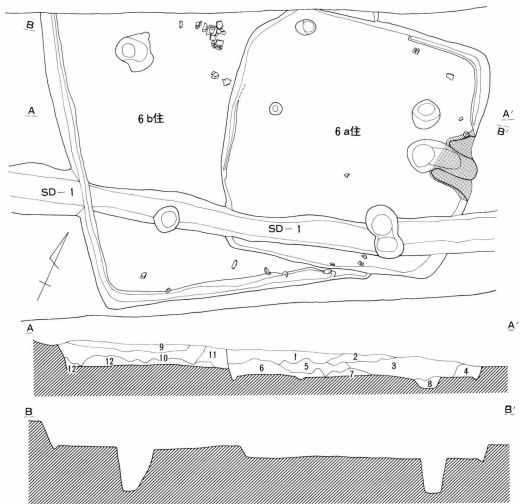
本址は、2軒の重複が認められ、新しい方から5 a 住・5 b 住と各々呼称する。

5 a 住は、住居の南側が調査区外にかかり全体の規模は明らかではない。規模は、東西5.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-36°-Wをとる。壁高は、10.5cm-31cm、平均23cmを測り、壁溝が良好に認められる。床面の状態は、概して良好である。主柱穴は、2本検出され、おそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。カマドは、東壁に付設されており、その北半を調査したが南半は調査区外である。しかし、その保存状態は良好であるといえよう。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、鬼高式土器が出土している。

5 b 住は、住居の東側を若干5 a 住に切られており、また南半は調査区外であり全体の規模は明らかではない。規模は、東西4.2m 南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、7.5m-17cm、平均12cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、不明瞭でありその構造についても明らかにし得なかった。炉址は、検出されていない。遺物は、小破片および細片のみの出土であった。覆土の状態は、硬質であり壁に近付くにつれてローム質になる。遺物は、諸磯式土器が出土している。

第6号住居址（第19・20図・図版9）

本址は、2軒の重複が認められ、新しい方から6 a 住・6 b 住と各々呼称する。

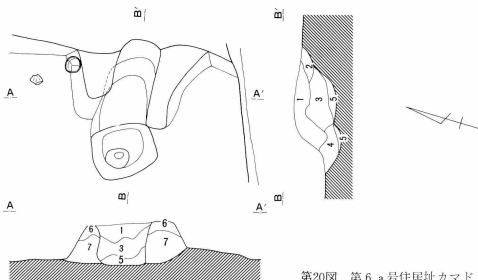


第19図 第6号住居址

0 2m

6a・b号住居址 土層説明

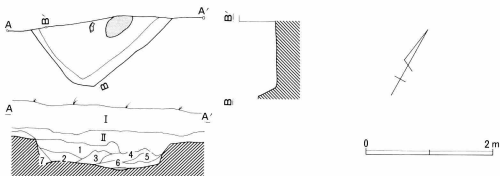
- | | |
|-----------|--|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒子と白色粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。 |
| 2層 暗褐色土 | ローム粒子、径1～2cmのロームブロックを少量含む。粘性なくしまりあり。 |
| 3層 暗茶褐色土 | ローム粒子・焼土粒子を均一に、径2cm程のロームブロック及び白色粒子を少量含む。粘性なくしまりあり。 |
| 4層 暗黄褐色土 | 径3～5cm程のロームブロックを含む。粘性ありしまりなし。 |
| 5層 暗褐色土 | ローム粒子を多量に、径1cm程のロームブロックを少量含む。粘性しまり共なし。 |
| 6層 暗黄褐色土 | 径2～3cm程のロームブロックを多量に含む。粘性しまり共なし。 |
| 7層 暗黒褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。 |
| 8層 黄褐色土 | 風化したローム土 |
| 9層 暗褐色土 | ローム粒子・白色粒子を微量に含む。粘性なくしまりあり。 |
| 10層 暗黒褐色土 | ローム粒子・白色粒子・焼土粒子・炭化粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。 |
| 11層 暗褐色土 | ローム粒子、径2cm程のロームブロックを少量含む。 |
| 12層 明褐色土 | ローム粒子を多量に含む。粘性ありしまりなし。 |



第20図 第6a号住居址カマド

6a号住居址カマド 土層説明

- 1層 暗褐色土 ローム粒子・白色粒子を均一に、焼土粒子・炭化粒子を微量に含む。粘性しまり共なし。
- 2層 暗赤褐色土 焼土粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。
- 3層 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロックを多量に含む。粘性しまり共なし。
- 4層 暗黄褐色土 ローム粒子・ロームブロックを微量に含む。粘性しまり共なし。
- 5層 暗褐色土 ローム粒子・粘土粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。



第21図 第7号住居址

7号住居址 土層説明

- 1層 暗褐色土 径1～2mmのローム粒子、径1cm程のロームブロック・炭化粒子を微量に含む。粘性に富みしまりあり。
- 2層 暗茶褐色土 径1～2mmのローム粒子を多量に含む。粘性に富みしまりあり。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子と径2～3cmのロームブロックを多量に、炭化粒子を微量に含む。粘性はなくしまりあり。
- 4層 暗黒褐色土 ローム粒子・炭化粒子を多量に、焼土粒子を微量に含む。粘性に富みしまりあり。
- 5層 暗黄褐色土 ローム粒子・炭化粒子・白色粒子を均一に含む。粘性しまり共なし。
- 6層 暗黒褐色土 炭化粒子を多量に、ロームブロック・焼土ブロックを微量に含む。粘性しまり共なし。
- 7層 黄褐色土 径3cm程のロームブロックを多量に含む。粘性しまり共なし。

6 a 住は、ほぼ全体を調査することができた。規模は、東西3.9m、南北3.9m以上である。主軸方向は、N-8°-Wをとる。壁高は、16cm~40cm、平均24cmを測り、壁溝が一部に認められる。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、2本検出され、2本柱穴の構造を有しているものと思われる。カマドは東壁に付設されており、その大半を調査したものの、その保存状態は良好であるとはいえない。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、鬼高式土器が出土している。

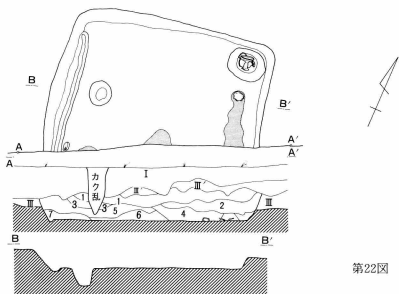
6 b 住は、住居の中央部を6 a 住に切られ、かつ北側の一部が調査区外にかかっており全体の規模は明らかではない。規模は、東西5.3m、南北については不明である。主軸方向は、N-32°-Wをとる。壁高は、25cm~43cm、平均33cmを測り、壁溝は明瞭に認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、4本検出されおそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。カマドは、6 a 住に切られているためか検出することはできなかった。また貯蔵穴も検出されていない。

第7号住居址（第21図・図版10）

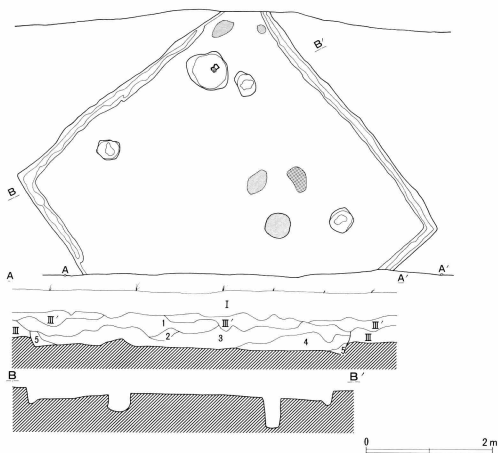
本址は、その南コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-23°-Eをとる。壁高は、35cm~40cm、平均37.5cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、比較的良好である。柱穴は、検出されず住居の構造についても不明である。床面には緩いくぼみがあり、底面の焼土化が認められたが、断面の観察からはカマドとは考え難く、炉址である可能性がある。また、貯蔵穴は確認されていない。出土遺物には、和泉式と思われる土器片が出土している。

第8号住居址（第22図・図版11）

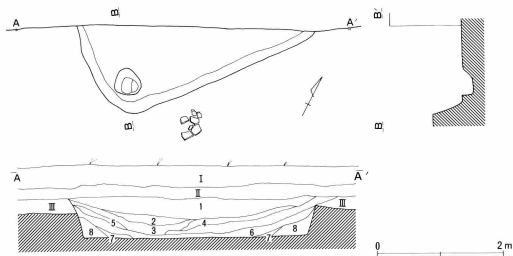
本址は、住居の南側が調査区外にかかり全体の規模については明らかにしえなかった。規模は、東西3.3m、南北については不明である。主軸方向は、N-16°-Wをとる。壁高は、17cm~33cm、平均24.7cmを測り、壁溝は西壁下のみに認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、2本検出されているが、整った構造を有しているものとはいえない。炉址が床面中央に検出され、また床面の一部に焼土が認められたが、カマドを検出することはできなかった。貯蔵穴は、比較的小ぶりであるが、和泉式の高杯、埴等の完形品が出土している。



第22図 第8号住居



第23図 第9号住居



第24図 第10号住居址

8号住居址 土層説明

- | | |
|----------|--|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒子、白色粒子を微量含む。粘性なく、しまりなし。 |
| 2層 暗褐色土 | ローム粒子を均一に、白色粒子、炭化物を微量含む。粘性なくしまりあり。 |
| 3層 暗褐色土 | ローム粒子（径2cm程の）ロームブロックを均一に含む。粘性なく、しまりなし。 |
| 4層 暗褐色土 | ローム粒子、炭化粒子、焼土粒子を微量含む。粘性なく、しまりあり。 |
| 5層 黒褐色土 | 炭化粒子、径5mm程の炭化物を多量に、ローム粒子、焼土粒子を微量含む。粘性なく、しまりあり。 |
| 6層 暗黄褐色土 | ローム粒子、径3cm程の土壌化したロームブロックを多量に含む。粘性に富みしまりあり。 |
| 7層 暗赤褐色土 | 焼土粒子を多量に、ローム粒子・炭化粒子・焼土ブロックを均一に含む。粘性に富みしまりあり。 |

9号住居址 土層説明

- | | |
|----------|--|
| 1層 暗黒褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を微量含む。粘性に富みしまりあり。 |
| 2層 暗黄褐色土 | ローム粒子、径5cm程のロームブロックを多量に含む。粘性しまり共ない。 |
| 3層 暗褐色土 | ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を均一に含む。粘性に富みしまりあり。 |
| 4層 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に、焼土粒子、径2cm程のロームブロックを少量含む。粘性なくしまりあり。 |
| 5層 黄褐色土 | 径2～3cm程のロームブロックを多量に含む。粘性しまり共ない。 |

10号住居址 土層説明

- | | |
|----------|---------------------------------|
| 1層 暗黄褐色土 | 基本Ⅲ層類似土の風化で、ローム粒子を多く含む。均質で軟かい。 |
| 2層 黒褐色土 | 基本Ⅲ層に類似しローム粒子を含む。均質緻密で粘性あり。 |
| 3層 黒茶褐色土 | 2層に類似するがローム粒がより多く、粘性が高い。 |
| 4層 暗茶褐色土 | 3層に類似するがより粘性が高くやや不均質である。 |
| 5層 褐色土 | 1層に類似するが若干の焼土粒子を含む。均質緻密である。 |
| 6層 暗褐色土 | ロームブロック等を含む。やや不均質で硬質緻密である。 |
| 7層 暗褐色土 | 6層に類似するが色調はやや暗く均質である。 |
| 8層 褐色土 | ロームブロック、ローム粒子を主体とする。粘性強く不均質である。 |

第9号住居址（第23図・図版12）

本址は、住居の北コーナーの一部と南コーナーが調査区外にかかっているとはいえ全体の規模はほぼ明らかである。規模は、東西4.9m、南北4.8mである。主軸方向は、N-25°-Eをとる。壁高は、7cm~20.5cm、平均16cmを測り、壁溝が北壁下および西壁下で途切れるほかはほぼ全体に認められる。床面の状態は、西壁より約1m程のところに硬化した緩い高まりが帯状に存在し、その帯状硬化帯を挟んで以西はやや低くなり軟弱である。主柱穴は、3本検出されおそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものと思われる。炉址は、住居のやや東側に検出され、少しはなれて粘土の分布が認められたが積極的なカマドとしての構造は認められなかった。貯蔵穴は、北コーナー付近に認められている。遺物には、和泉式土器が出土している。

第10号住居址（第24図・図版12）

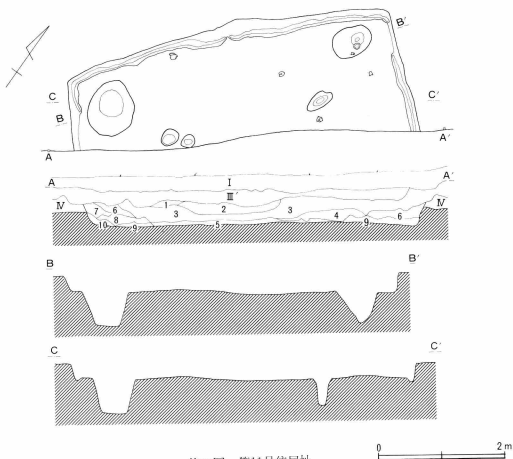
本址は、その南コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-39°-Eをとる。壁高は、34cm~50cm、平均42cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、比較的良好である。柱穴は、検出されず住居の構造についても不明である。カマドは検出されていない。貯蔵穴は、北東コーナー付近に検出されている。出土遺物は、和泉式土器が出土している。

第11号住居址（第25図・図版13）

本址は、住居の南側が調査区外にかかり全体の規模については明らかにしえなかった。規模は、東西5.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-32°-Wをとる。壁高は、18cm~35.5cm、平均27cmを測り、壁溝が北壁下と東壁下に認められる。床面の状態は、9号住と類似した帯状硬化帯が検出され、壁付近は概して軟弱である。主柱穴は、2本検出されているが、整った構造を有しているものとはいえない。カマドは認められずおそらく炉址を付設するものであると思われる。貯蔵穴は、住居の北東コーナー付近に検出されているが、あるいは北西コーナー付近に認められたピットも貯蔵穴かも知れない。遺物は、和泉式土器が出土している。

第12号住居址（第26図・図版13）

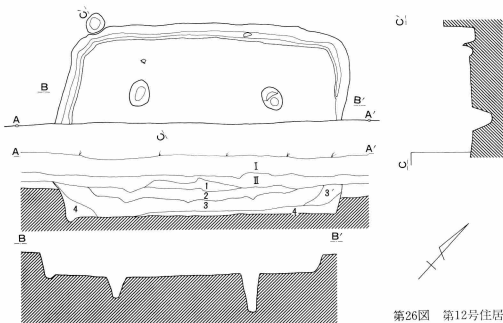
本址は、住居の南側が調査区外にかかり全体の規模については明らかにしえなかった。規模は、東西4.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-35°-Wをとる。壁高は、27cm~45cm、平均37cmを測り、壁溝が壁下全周に認められる。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、2本検出されており、



第25図 第11号住居址

11号住居址 土層説明

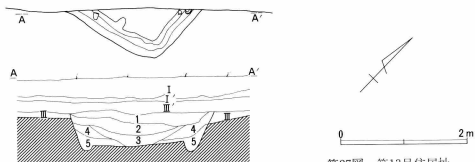
- | | |
|----------|---|
| 1層 暗褐色土 | 暗褐色土を主体とし、暗黒褐色土を微量含む。粘性なししまり良し。 |
| 2層 暗黄褐色土 | 径2～3cm程のロームブロック・ローム粒子を多量に含む。粘性なししまり良し。 |
| 3層 暗褐色土 | 径2～3cm程のロームブロック・ローム粒子を少量含む。粘性ややありしまり普通。 |
| 4層 暗褐色土 | 3層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 5層 暗褐色土 | 3層に類似するが、粘性ありしまりも非常に良い。 |
| 6層 暗褐色土 | 基本Ⅲ層と類似するが径2～3cm程のロームブロック・ローム粒子を少量含む。粘性なししまり普通。 |
| 7層 暗褐色土 | 6層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 8層 暗黒褐色土 | 6層に類似するが、色調はだいぶ暗い。 |
| 9層 暗黄褐色土 | ローム粒子を多量に含む。粘性ややありしまり良し。 |
| 10層 暗褐色土 | 6層に類似するが、しまりがはるかに良い。 |



第26図 第12号住居址

12号住居址 土層説明

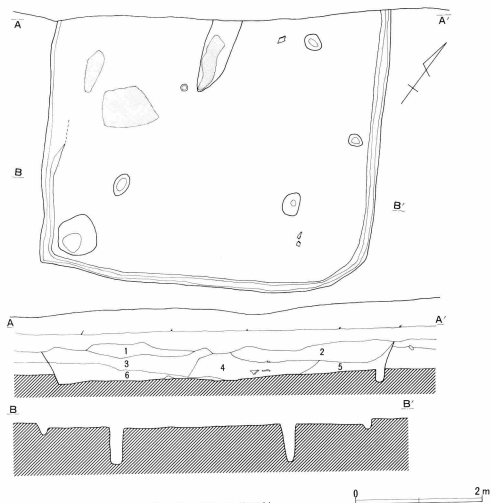
- 1層 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、基本Ⅲ層を多く含む。不均質で粘性普通。
- 2層 明黒褐色土 黒褐色土を主体とし、基本Ⅲ層土を含む。粘性強い。
- 3層 暗褐色土 基本Ⅲ層土を多く、白色粒子・焼土粒子・ローム粒子を少量含む。粘性強くしまり良い。
- 3層 やや暗い褐色土 少量の黒色土と多くの白色粒子を含む。粘性普通しまり強い。
- 4層 褐色土 径2cm程の黒色土ブロック・ロームブロックを斑点状に含む。粘性普通しまり強い。



第27図 第13号住居址

13号住居址 土層説明

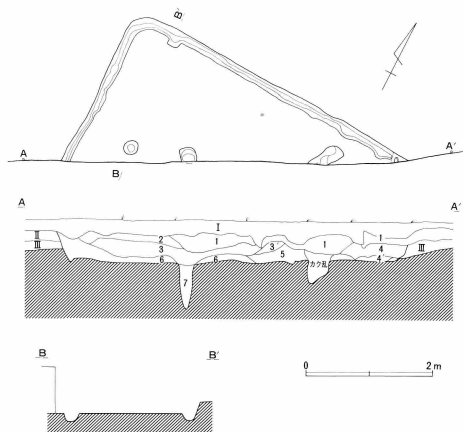
- 1層 褐色土 白色粒子を少量、黒褐色土を濁点状に含む。粘性ありしまり普通。
- 2層 褐色土 1層に類似するがやや暗く、しまりが強い。
- 3層 暗褐色土 径2cm程の褐色土ブロックや径1～4cm程のロームブロックを所々に含む。粘性しまり共強い。
- 4層 褐色土 若干の黒色土と微量の白色粒子を含む。1、2層より明るく粘性普通しまりは強い。
- 5層 やや明るい褐色土 若干の黒色土と径2～5cm程のロームブロックを多量に含む。粘性しまり共強い。



第28図 第14号住居址

14号住居址 土層説明

- | | |
|---------|---|
| 1層 暗褐色土 | 径1～5cm程のロームブロックを少量、径1mm程の火山灰粒子を少量含む。
粘性弱くしまり良し。 |
| 2層 暗褐色土 | 1層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 3層 暗褐色土 | 火山灰粒子を多量に、径3～5cm程のロームブロックを少量含む。2層より
やや暗く粘性なくしまり良し。 |
| 4層 暗褐色土 | 火山灰粒子を多量に、ローム粒子を少量含む。 |
| 5層 明褐色土 | 基本Ⅱ層に類似し、火山灰粒子を少量含む。しまり強い。 |
| 6層 暗褐色土 | 径1cm程のロームブロックとローム粒子を少量含む。粘性ありしまり弱い。 |



第29図 第15号住居址

15号住居址 土層説明

- | | |
|------------------|---|
| 1層 暗褐色土 | ローム粒子を多量に、黒色土を斑点状に粘性なししまり普通。 |
| 2層 やや暗い
暗褐色土 | 1層に類似するがローム粒子を1層より少なく含む。粘性ややありしまり普通。 |
| 3層 黒色土 | 基本Ⅲ層に類似するが、ローム粒を斑点状に含む。粘性ありしまり普通。 |
| 4層 やや明るい
暗褐色土 | 1層に類似するがローム粒子を1層よりやや多く含む。粘性ややありしまり良し。 |
| 4'層 やや明るい暗褐色土 | 基本的に4層と同様だがブロック状炭化物を多く含む。 |
| 5層 暗褐色土 | 若干の黒色土が斑点状に、ローム粒子・焼土粒子・焼土ブロックを含む。粘性ややありしまり普通。 |
| 6層 褐色土 | 暗褐色土や黒色土を斑点状に多量に含む。粘性ややありしまり普通。 |

比較的整ったプランを呈するものと推定される。炉址を付設するものであると思われるが、調査区内では検出することはできなかった。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、樽式土器の完形の壺が東壁によりかかるような形で検出された。なお、覆土第2層中には和泉式と思われる土器片が比較的多く検出されたが、それ以下の土層からの出土遺物は全て樽式土器であった。

第13号住居址（第27図・図版14）

本址は、その北コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-0°-Wをとる。壁高は、39cm~47cm、平均42cmを測り、壁溝は調査区内全域で認められた。床面の状態は、比較的良好である。柱穴は、検出されず住居の構造についても不明である。カマドおよび貯蔵穴は、検出されていない。出土遺物は、和泉式のコップ形土器の完形品が覆土中より出土している。

第14号住居址（第28図・図版14）

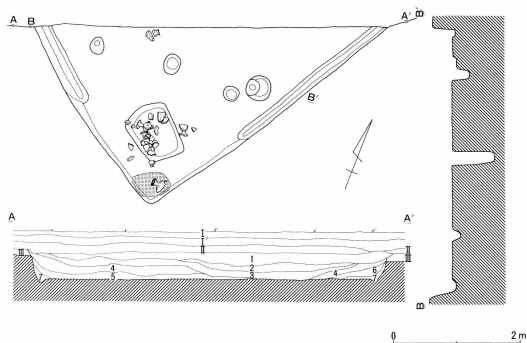
本址は、住居の北側が調査区外にかかり全体の規模については明らかにしえなかった。規模は、東西5.4 m、南北については不明である。主軸方向は、N-20°-Wをとる。壁高は、6cm~18cm、平均10cmを測り、壁溝が西壁下の一部で検出されなかった外は、比較的明瞭に認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、3本検出されており、比較的整った構造を有しているものと思われる。炉址は、住居中央のやや北よりに検出され、カマドは認められなかった。また、この炉址の外に2ヶ所の焼土が床面より若干浮いた状態で検出されている。貯蔵穴は、住居の南西コーナー付近で検出された。この貯蔵穴は、その底面に粘土が堆積している。遺物は、和泉式土器が出土している。

第15号住居址（第29図・図版15）

本址は、その北コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-3°-Wをとる。壁高は、8cm~19cm、平均15cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、1本検出されたが住居の構造については不明である。なお、住居東端で白色粘土が検出されているが、カマドとは考えにくいものである。貯蔵穴は検出されていない。出土遺物は、和泉式土器が出土している。

第16号住居址（第30図・図版15・16）

本址は、その南コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。



第30図 第16号住居址

16号住居址 土層説明

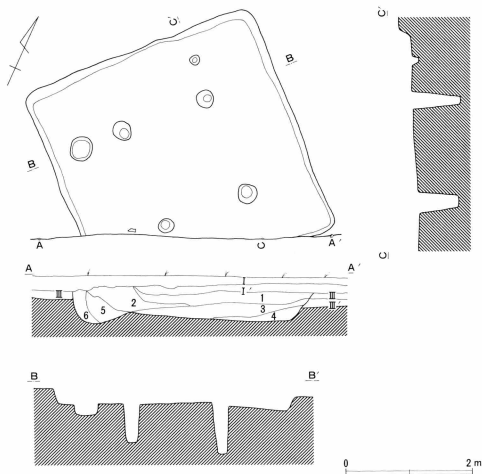
- | | |
|----------|---|
| 1層 黒褐色土 | 基本Ⅲ・Ⅲ'層の風化混合層で、軟かく均質で粘性に乏しい。 |
| 2層 黒褐色土 | 1層に類似するが、表面風化の乏しいロームブロック・粒子を含み不均質である。 |
| 3層 暗褐色土 | 風化の進行した層で、ロームブロックの混入はまれで均質である。 |
| 4層 黒褐色土 | 2層に類似するが、ロームブロックの量が少なく基本Ⅲ・Ⅲ'・Ⅳ層が斑点状に混じる。炭化物を少量含む。 |
| 5層 暗茶褐色土 | ローム粒子・ローム風化ブロックを主体とし、均質緻密で粘性あり。 |
| 6層 暗茶褐色土 | 5層に類似するがロームブロックが多く風化は進んでいない。不均質で粘性に乏しい。 |
| 7層 褐色土 | ロームブロック・ローム粒子を主体とし、不均質で粗い。 |

19a号住居址 土層説明

- | | |
|-------------|---|
| 1層 褐色土 | 黒色土を斑点状に含み、白色粒子を微量含む、しまり粘性共に弱い。 |
| 2層 やや明るい褐色土 | 1層に類似するが、1層より、しまりが強く色調は明るい。ロームブロック（径2cm程）が点在する。 |
| 3層 暗黄褐色土 | 貼り床部、ローム土（基本Ⅳ層）褐色土及び黒褐色土がブロック状に混じる、しまり、粘性共に強い。 |

19b号住居址 土層説明

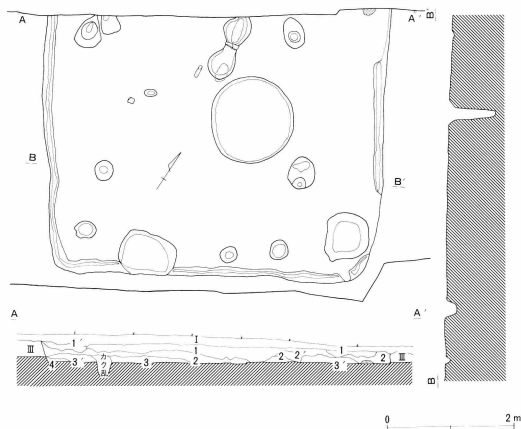
- | | |
|----------|---|
| 1層 暗褐色土 | 黒褐色土中に褐色土（基本Ⅲ層）を斑点状に含む、しまりの強い層。 |
| 2層 暗黄褐色土 | 褐色土（基本Ⅳ層）中に、ロームブロック（径2～6cm）を斑点状に含む。しまり強い。 |
| 3層 暗褐色土 | 黒褐色土中に多量の褐色土（基本Ⅲ層）を含むしまりの強い層。 |
| 4層 黄褐色土 | ローム土（基本Ⅳ層）の二次堆積層。 |



第31図 第17号住居址

17号住居址 土層説明

- 1層 暗褐色土 ローム土を斑点状に、白色粒子・ローム粒子を所々に含む。粘性あり。
 - 2層 黒褐色土 若干の褐色土を濁点状に、焼土粒子・ロームブロック・ローム粒子を所々に含む。緻密で粘性あり。
 - 3層 褐色土 黒褐色土が濁点状に、ローム粒子を斑点状に、白色粒子・炭化物粒子を所々に含む。緻密で粘性あり。
 - 4層 暗褐色土 3層に類似するが、3層より、やや明るい。
 - 5層 明褐色土 多量のローム粒子と径2～3cm程のロームブロックが所々に、若干の黒褐色土が濁点状に含まれる。3層より緻密でなく粘性弱い。
 - 6層 やや暗い黄褐色土 基本Ⅲ層の二次堆積で、ローム粒子を多量に、ロームブロック・黒褐色土を斑点状に含む。緻密さ粘性共に弱い。
- 明 度 明 6>5>2>1>4>3 暗



第32図 第18号住居址

18号住居址 土層説明

- 1 層 暗褐色土 暗褐色土を主体に、黒色土を多く含む。ローム粒（径1mm以下）白色粒子（径1mm程）をも含み、ロームブロック（径2～3cm程）を微量含む。
- 1'層 暗黄褐色土 1層より黒色土の混入度は低く、色調は明るい。粘性なく、しまり強い。
- 2 層 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、黒色土・白色粒子を微量含む。1層よりローム粒の混入度は高い。色調は極めて1'層に近い。粘性ややあり、しまりは強い。
- 2'層 暗黄褐色土 暗褐色土を主体とし、黒色土を少量含む。しまりは強い。
- 3 層 暗褐色土 黒色土の混入を目安として、色調は、1層と1'層の中間色である。白色粒子は、ほとんど含まず、粘性ややあり、しまりは強い。
- 3'層 暗褐色土 3層より、ローム粒の混入は、やや多く、黒色土を濁点状に混入する。粘性あり、しまり強い。
- 4 層 暗黄褐色土 褐色土（Ⅲ）を主体に暗褐色土や極少量の黒色土を混入する。粘性あり。しまり普通。
- 明 度 明 4 > 2 > 2' > 3 > 3' > 1 暗

主軸方向は、 $N-30^{\circ}-E$ をとる。壁高は、 $29\text{cm}\sim 44\text{cm}$ 、平均 36cm を測り、壁溝は南および東壁下に認められている。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、1本検出されたが住居の構造については不明である。また、南東コーナー部に厚さ約 10cm の白色粘土が検出されており、これは当初高坏の出土から、カマドではないかと考えて調査を進めたが、焼土・炭化物等が認められず、また形態もまとまりがなく、単なる粘土塊の堆積であると考えてよい。貯蔵穴はコーナー付近に検出され、和泉式の完形の埴や高坏が底面から浮いた状態で出土している。

第17号住居址（第31図・図版17）

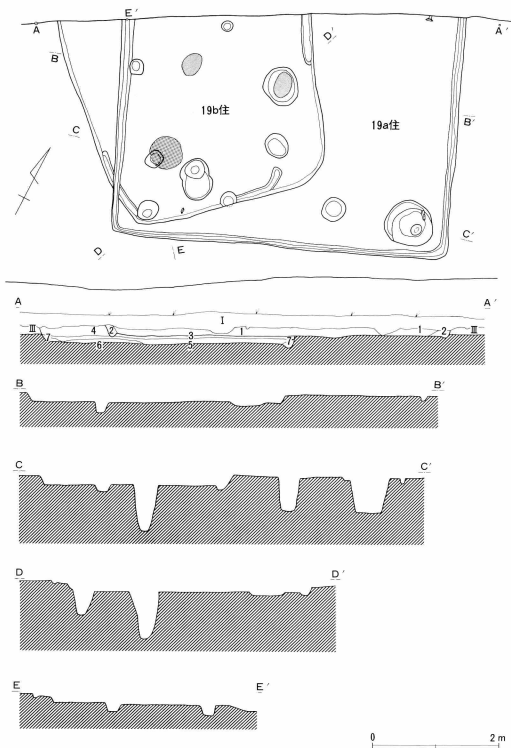
本址は、その南コーナーが調査区外にかかっているとはいえ、全体の規模はほぼ、明らかである。その規模は、東西 3.8m 、南北 3.8m である。主軸方向は $N-33^{\circ}-E$ をとる。壁高は、 $11\text{cm}\sim 31\text{cm}$ 、平均 24cm を測り、壁溝は認められない。床面の状態は、比較的軟弱である。主柱穴は、4本検出され、一般的な住居の構造を呈していると思われる。炉址、カマドおよび貯蔵穴は、検出されなかった。出土遺物は、和泉式土器である。

第18号住居址（第32図・図版17）

本址は、住居の北側が調査区外にかかり全体の規模については明らかにしえなかった。規模は、東西 5.4m 、南北については不明である。主軸方向は、 $N-26^{\circ}-W$ をとる。壁高は、 $1\text{cm}\sim 12\text{cm}$ 、平均 6cm を測り、壁溝は南東コーナー付近の壁下の一部で途切れる外は良好な形で検出された。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、4本検出されており、比較的整った構造を有しているものと思われる。炉址は、住居中央のやや北よりに検出され、カマドは認められなかった。この炉址の形状は竈状を呈するもので、そのくびれ部に「枕石」を据える特徴的な形態を有していることは注意しておきたい。貯蔵穴は、住居の南西コーナー付近で検出された。遺物は、和泉式土器が出土している。

第19号住居址（第33図・図版18）

本址には、2軒の重複が認められ、新しい方から19a住・19b住と各々呼称する。19a住は、住居の北側が調査区外にかかり全体の調査をすることはできなかった。したがって、その規模については明らかにしえなかったが、東西 5.3m を測り、南北については不明である。主軸方向は、 $N-22^{\circ}-W$ をとる。壁高は $1\text{cm}\sim 4\text{cm}$ 、平均 2cm を測り、壁溝は調査区の壁下の全周で検出された。床面の状態は、比較的良好であり、特に北半部はおよび貼床部（3層）は非常に硬



第33图 第19号住居址

質である。主柱穴は、2本検出されており、2本柱穴の構造を有しているものと思われる。炉址は、床面のほぼ中央で検出された。また西壁付近に粘土の堆積が認められたが、積極的にカマドとする根拠は認められなかった。貯蔵穴は住居の南西コーナー付近で検出され、その底面から浮いた状態で和泉式の高坏が出土しているほか、覆土中からは樽式の破片が多く検出された。

19b住は、住居の中央部を19a住に切られ、かつ北側の一部が調査区外にかかっており全体の規模は明らかではない。規模は、東西3.8m、南北については不明である。主軸方向は、N-31°-Wをとる。壁高は、5cm-18.5cm、平均12cmを測り、壁溝は壁下の一部に認められる。床面の状態は、比較的硬質で、覆土もまた硬質、緻密である。主柱穴は、4本検出されているが、整った形態とはいえない。炉址は、19a住の掘り方に一部が切られているためか、良好な状態とはいえないが、炉床の一部を検出することができた。貯蔵穴は検出されていない。遺物は、樽式を主体とする土器破片である。

2. 溝状遺構

本遺跡で検出された溝状遺構は、3条であり、現状の農道に並行するように走っているものである。これは、この農道と関連をもって掘られたものと考えられるが、その目的等は明らかにし得なかった。

SD-1 (第6・7図) 本址は、3区の一部と4区全線にあたる、全長98mにわたって検出されたもので、1～6号の各住居址をすべて切ってつくられている。溝の方向は概ねN-63°-Eであり、幅約70cm、深さは約35cmを測る。底面の形状は、比較的平坦で、深さは一定している。本址の時期は、浅間山系A軽石を覆土中に含み、かつ近・現代の遺物を含んでおり、比較的最近の溝であると考えてよいものである。

SD-2 (第5・6図) 本址は、3区のほぼ中央に位置し、延長53mにわたって検出されたものである。溝の方向は概ねN-55°-Eであり、幅約100cm、深さは約20cmを測る。底面の形状は、比較的丸く凹凸を有するとはいえず深さは概ね一定している。本址の時期は、浅間山系A軽石を覆土中に含み、かつ近・現代の遺物を含んでおり、比較的最近の溝であると考えてよいものである。

SD-3 (第5図) 本址は、2区・3区の境界に位置し、延長8mにわたって検出されたもので、溝の方向は概ねN-61°-Eであり、幅約40cm、深さは約15cmを測る。底面の形状は、比較的凹凸を有するが、深さは一定している。本址の時期は、浅間山系A軽石を覆土中に含み、かつ近代の遺物を含んでおり、比較的新しい時期の溝であると考えてよいものである。

3. 土 塚

本遺跡から検出された土塚は、総数28基であり、その形態から次の4類に分類される。これらの土塚の規模等は、第1表に掲げたとおりである。

A 類、平面形態が円形のもの

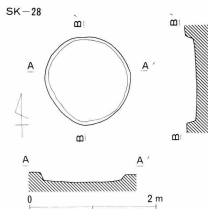
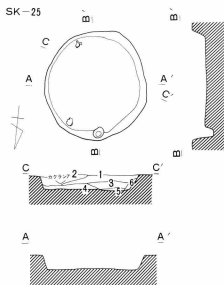
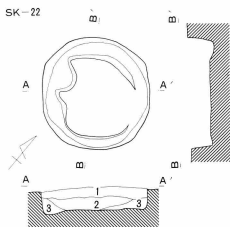
(1. 底面が平坦なもの、2. 小形で底面の丸いもの)

B 類、平面形態が楕円形のもの

C 類、平面形態が不整形のもの

第1表 真鏡寺後遺跡土塚一覧表

番号	長 径	短 径	深 さ	分 類	備 考
1	80cm	—	114cm	A-2	諸磯式
2	76cm	—	28cm	A-2	A 軽石含む
3	37cm	—	24cm	A-2	鬼高式
4	—	90cm	27cm	B	A 軽石含む
5	54cm	48cm	36cm	A-2	A 軽石含まず ²
6	162cm	130cm	18cm	C	◇
7	—	72cm	23cm	B	◇
8	—	90cm	10cm	B	A 軽石含む
9	56cm	36cm	18cm	A-2	A 軽石含まず ²
10	50cm	48cm	17cm	A-2	和泉式高坏
11	40cm	40cm	23cm	A-2	A 軽石含まず SK-9 に類似
12	48cm	42cm	38cm	A-2	A 軽石含まず ²
13	76cm	56cm	23cm	A-2	◇
14	116cm	110cm	37cm	A-1	◇
15	50cm	42cm	37cm	A-2	A 軽石含まず ²
16	40cm	36cm	19cm	A-2	◇ 付近に礫あり
17	60cm	44cm	22cm	A-2	石製模造品(剣形品)
18	48cm	44cm	34cm	A-2	A 軽石含まず ²
19	104cm	94cm	20cm	A-1	◇
20	200cm	160cm	28cm	B	◇
21	—	154cm	33cm	C	◇
22	180cm	168cm	36cm	A-1	◇
23	92cm	88cm	9cm	A-1	◇
24	58cm	—	55cm	A-2	◇
25	174cm	156cm	24cm	A-1	◇
26	74cm	70cm	24cm	C	覆土上部にA 軽石純層あり
27	—	61cm	14cm25cm	A-2	和泉式
28	140cm	130cm	16cm	A-1	A 軽石含まず ² 18住を切る



第34図 土坑 (1)

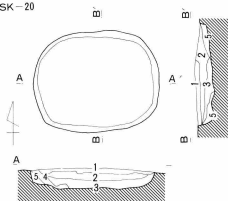
SK-22 土層説明

- 1層 暗褐色土 全体にローム粒子、ロームブロックを多量に、軽石を少量含む。基本IV層のものと同様と思われる。粘性あまりなく、しまり有り。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む。1層より粘性を増し、しまりが弱くなり、色調は暗い。
- 3層 暗褐色土 2層に類似するが、しまりが弱くなり色調は更に暗い

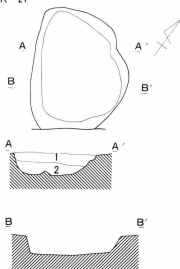
SK-25 土層説明

- 1層 黒褐色土 径1～2mmのローム粒子を均一に、部分的にロームブロックを含む。軽石を含むが基本IV層中のものと同様と思われる。粘性少々有り、しまりが弱い。
- 2層 黒褐色土 1層に類似するが、ローム粒子が少なく粘性が若干増す。軽石を含む。
- 3層 黒褐色土 1層に類似するが、ローム粒子の混合率は激減する。粘性は多いに増すがしまり弱し。
- 4層 黒褐色土 3層に類似するが、ローム粒子を多く含み色調がやや明るい。
- 5層 黒褐色土 3層に類似するが、ロームブロックが含まれる。
- 6層 黒褐色土 3層に類似するが、壁際の崩壊ロームを若干含む。

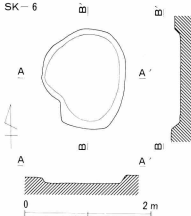
SK-20



SK-21



SK-6



SK-20 土層説明

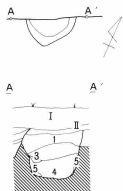
- 1層 黒褐色土 ローム粒子を少量、白色粒子を多量に含む。粘性はなく、しまり普通。
- 2層 暗褐色土 白色粒子を微量、ローム粒子を1層より若干多く含む。粘性なく、しまり良し。
- 3層 暗褐色土 白色粒子を微量、ローム粒子を2層より多く含む。粘性ややあり、しまり良し。
- 4層 やや明るい暗褐色土 基本Ⅲ層を主体とし、黒色土を斑文状に、白色粒子を微量に含む。粘性弱く、しまりなし。
- 5層 暗褐色土 4層に類似するが、色調がやや明るい。

SK-21 土層説明

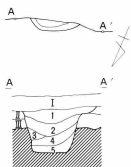
- 1層 褐色土 ロームブロックを多量に含む。軽石を含むが、基本Ⅳ層中のもと同様のものと思われる。粘性はほとんど無く、しまりが弱い。
- 2層 褐色土 1層に類似するが、色調はやや暗く、粘性が増し、しまりは更に弱くなる。

第35図 土坑(2)

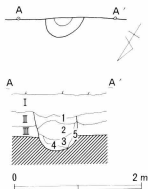
SK-1



SK-2



SK-24



第36図 土坑 (3)

SK-1 土層説明

- 1層 暗褐色土 基本Ⅲ層に類似するが、軟質で色調が暗い。
- 2層 黒色土 非常に硬質・緻密である。
- 3層 暗褐色土 1層に類似し、ローム粒子を主体とする。
- 4層 黒褐色土 2層の土にローム粒子を含んだもので、2層より軟質である。
- 5層 褐色土 ローム風化土で、壁崩壊土層と思われる。

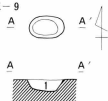
SK-2 土層説明

- 1層 暗褐色土 多量のハードロームブロックと浅間山系A軽石を含み不均質である。
- 2層 暗褐色土 多量の浅間山系A軽石を含むがロームブロックが少ない。
- 3層 暗褐色土 1層に類似するが、ロームブロックが小さく均質である。
- 4層 黒褐色土 均質で基本Ⅱ層に類似したものに浅間山系A軽石を含む。
- 5層 黒褐色土 1層と4層に類似し、混合土の状態である。

SK-24 土層説明

- 1層 暗褐色土 微砂粒を全体に混入し軽石を含むが基本Ⅳ層のものと思われる。上層の道路部分により最上部には玉砂利が混じる。粘性なししまり弱い。
- 2層 暗褐色土 軽石を含み部分的に極めて緻密になる。色調は最も暗く、粘性なくしまりが強い。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に混入する。粘性が非常に強い。
- 4層 暗黄褐色土 3層に類似するが、ローム粒子をより多く含む。
- 5層 暗黄褐色土 4層に類似するが、しまりがない。

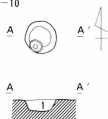
SK-9



SK-9 土層説明

- 1層 暗茶褐色土 径1～2mmのローム粒子を微量に含み、所々に径5mm程度の岩化物が見られる。粘性に富みしまりを有する。

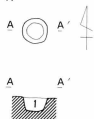
SK-10



SK-10 土層説明

- 1層 暗褐色土 径1～2mmのローム粒子を均一に含む。粘性がなく、しまりを有する。

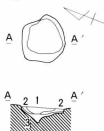
SK-11



SK-11 土層説明

- 1層 暗茶褐色土 径1～2mmのローム粒子、径5mm程のロームブロックを微量に含む。粘性がなく、しまりを有する。

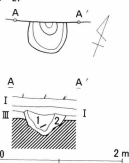
SK-26



SK-26 土層説明

- 1層 灰褐色土 浅間山系A軽石の純層で、径8mm大までの物を多量に含み、ローム粒子を均一に含む。粘性はまったくなく、しまりは層の下位に行くに従って弱くなる。
- 2層 暗黄褐色土 腐食土にローム粒・ローム微粒子を多量に含む。しまりがなくフカフカである。
- 3層 黄褐色土 2層に類似するが、ロームブロックを多量に含む。

SK-27

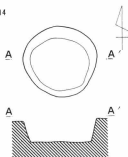


SK-27 土層説明

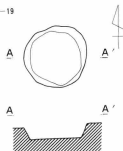
- 1層 黒褐色土 炭化物、炭化粒子を多量に、ローム粒子、焼土粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。
- 2層 暗黄褐色土 ローム粒子、白色粒子を多量に含み、径1～2cmのロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりは1層より有る。

第37図 土坑(4)

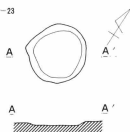
SK-14



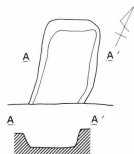
SK-19



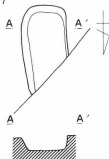
SK-23



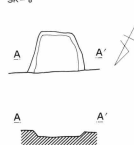
SK-4



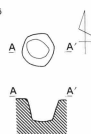
SK-7



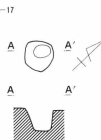
SK-8



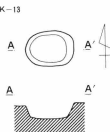
SK-5



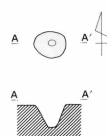
SK-17



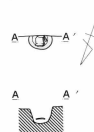
SK-13



SK-15



SK-3



0 2 m

第38図 土坑(5)

第V章 真鏡寺後遺跡の提起する問題－土器の住居内遺棄行為について－

真鏡寺後遺跡の第2a号住居址等で認められた完形土器の集中的出土状態は、現代の生活材の消費活動による廃棄行為とは、おのずと異なっているはずである。古代社会において、充分使用に耐えうる土器類を廃棄する行為は、たとえそれが宗教的行為であっても、ある社会的関係と構造化された観念であると考えてよい。本章では、真鏡寺後遺跡で認められたこのような現象から、本遺跡周辺地域における土器の生産と廃棄の問題の一端に接近しようとするものである。

和泉期後半頃より鬼高Ⅰ式頃まで、住居内に土器が大量に、しかもそれがあたかも遺棄状態を示しているように出土することは、つとに注目されている。例えば、兎玉町ミカド遺跡(坂本、1981)や後張遺跡(立石他、1983)、本庄市夏目遺跡(石橋他、1985)等で顕著に認められるものであり、ミカド遺跡17号住例や後張遺跡9・24・86・148号住例を典型としている。このような出土状態は、一方では当時の生活状態を考える上で重要な問題を提起し、あるいは住居の人員構成を知る手がかりをも提供するものであろう。勿論、いわゆる廃棄状態と考えられるものも認められるが、これらは生活に関わる消費活動として当然起こり得る現象であり、汎時代的な行為と思われる。ともあれ、この土器遺棄状態は、土器生産と消費の問題を考える上で、一つの大きな問題を提起するものであると考えてよいであろう。

また、この遺棄状態には、ミカド遺跡24号住例、後張遺跡32号住に認められるような、床面の一角に一定の配置を持った二次的な土器の遺棄状態を示すような一群のあることにもまた注目しておくべきであろう。これらは、住居の廃絶あるいはその後に、ある意志を持った行為、おそらくはある宗教的な行為としての一定の祭儀が行われていたと考える事ができるものである。

このような、使用に耐えうる状態にある土器群の使用の中断は、一方では、カマドに設置された甕類や甔、入れ子状に重ねられて出土する坏類など、当時の生活状態をとどめるかのような出土状態を示しており、これらはこのような出土状態から住居が移動・新設する際に遺棄されたものであると考える事ができる。つまり、土器の利用状態とは直接関わりなく、住居の移動と土器の廃棄が行われていたことが推定されるのである。このような住居の移動が、ある偶然的な事件によって惹き起こされたとするには、土器の遺棄された状態は一般的であり、やはり住居の移動も計画的に準備されていたものであるならば、その移動の時点で新しい土器群が供給されたものと考えてよい。日常生活における土器の供給の形態は不明な点が多いが、この移住に伴う土器群の供給形態は、その時点で一括生産－供給された場合、或は、日常的に土器群が集中的に蓄積され、住居の移動の時点で供給されるかのどちらかであろう。しかし、竪穴住居一般では、先にみた土器の遺棄行為がかなり一般的であるところから、この土器の〔供給－遺棄〕の循環の中では、土器の蓄積は起こり難しく、集落全体の一括生産も考え難い点からみれば、ある特定の場所に蓄積されていたと考えてよい。

このような、ある一定の場所に土器が蓄積されている状態は、日常生活の中での剰余労働の蓄積の一つの形態であると考えることができるが、鬼高期における剰余労働力の蓄積を考える場合、在地首長層との関連や、他の労働生産物との関わりを考える必要がある。在地首長層への貢納の原

初的な形態は、穀霊の付与に関わる初穂の貢納、あるいは祭祀儀礼の費用や共同体的労働の備蓄のための蓄積の形態を取るものとされており、各種の労働生産物は、このような形態の中で首長のもとに蓄積されていったものと思われる。したがって、先にみた土師器においても、ある特定の場所とは、このような在地首長の管理する場所であった可能性があろう。このことを、ここで特定することは難しいが、須恵器や鉄製品のような各集落での生産の難しい手工業生産物の場合、首長間交易を想定せざるを得ず、あるいは、埴輪生産も窯址が一般集落には付随しておらず、特定集落への集中する現象から、少なくとも集落間の分業の一定の発達を前提としていたと考えることができよう。また、土師器の場合も鬼高Ⅱ式以降、土師器製作の専用の「回転する製作台」が使用されるなど、ある種の専門化の進行が推定されるところから、集落間での一定の分業を考える必要があろう。つまり、土師器においてもそれが各集落で個別に生産されたわけではなく、なんらかの集落間の交通を前提としていたと考えてよい（注1）。

ともあれ、古墳群の設定に伴って移動させられたと考えられる集落の存在やそのほかの土地利用状態と集落の移動のあり方から推して、各竪穴住居の成員は土地の占取主体であったとは考え難く、土地の占取は、これを指導する首長層に代表され、彼らの在地首長からの自立は微弱な状態であったと考えられるところから、土器の蓄積も首長を介して行われると推定することはあながち不当なことではないであろう（注2）。つまり、共同体内の土地の占有や土器の占有は、首長を通して実現されていることが推定され、これらの交通の結節点に在地首長が存在したと考えておきたい。このような土器の貢納による蓄積と、下賜という形式をとる再配分の機構は、共同体的な生産関係に関わる交通の一つの形式であると考えられよう。しかし、この共同体の中での貢納の過程で蓄積された剰余生産物は、少なくとも7世紀代には先にみた土器の遺棄状態は激減するところから、すでにそれらは共同体内に再配分するものとしてではなく、首長層の私富へと転化していたと考えてよい。ともあれ、少なくとも鬼高Ⅱ期頃からは、真間・国分期に認められるような律令制的な貢納制の先駆をなす貢納の形態が形成されており、更に律令的貢納制にともなって発達する在地交易圏の基盤もまた形成されていたと推定することができる（注3）。このような、古墳時代に認められる在地首長層にかかわる共同体的関係を前提に、真間・国分期の土師器生産が展開していったと考えることができよう。

以上、ここに本遺跡の調査で考えたいいくつかの点についての問題提起を行ったが、これらを含めた本書の欠は、『真鏡寺後遺跡Ⅱ』の報文中で補いたいと考えている。

（鈴木徳雄）

注

- 1) 土師器の「回転する製作台」の使用については、藤岡市堀ノ内遺跡（志村、1982）、調布市染地遺跡（福田、1977）等で認められた坏底部の糸切り痕や、上里町天神林遺跡（小久保・昼間、1983）で認められるような土器製作台から切り離した痕跡の存在、また、ヨコナデ等の調整重複部が一ヶ所しか認められないものがしばしば観察されるところから推定されるものである。なお、このことについては、別稿を予定している。
- 2) この在地首長に関わる問題については、（鈴木、1984）において触れたことがある。
- 3) 律令制的貢納に関わる土器の問題については、（鈴木、1984）を参照されたい。

引用・参考文献

- 石橋圭一他（1985）『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集第2分冊
- 石母田正（1974）『日本の古代国家』岩波書店
- 小久保徹他（1983）『天神林・高野谷戸』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第22集
- 駒宮史朗（1973）『枇杷橋遺跡発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告第20集
- 坂本和俊（1981）『ミカド遺跡の調査』『金屋遺跡群Ⅰ』児玉町教育委員会
- 坂本和俊他（1986）『前組羽根倉遺跡発掘調査報告』前組遺跡発掘調査団
- 佐々木幹雄（1980）『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 志村 哲（1982）『堀ノ内遺跡群』藤岡市教育委員会
- 菅谷浩之他（1980）『長沖古墳群』児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄（1981）『ミカド西遺跡の調査』『金屋遺跡群Ⅰ』児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄（1981）『十二天遺跡の調査』『金屋遺跡群Ⅰ』児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄（1983）『古代児玉郡の土地利用と村落の変貌』『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町教育委員会
- 鈴木徳雄（1984）『いわゆる北武蔵系土師器環の動態』『土曜考古』第9号
- 立石盛詞（1983）『後張』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第26集
- 利根川章彦（1981）『倉林後遺跡』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第3集
- 昼間孝志（1982）『金草窠址』『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編さん室
- 福田健司（1977）『調布市染地遺跡－第Ⅳ地区B地点－』調布市埋蔵文化財調査報告1

真鏡寺後遺跡発掘調査組織

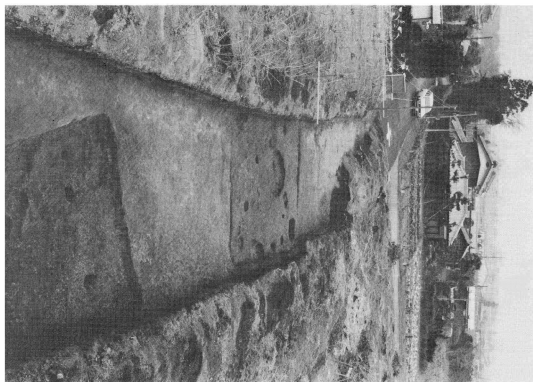
- 団長 根岸幸平（児玉町長）
- 副団長 石井栄一（児玉町教育委員会教育長）
- 事務局 岩上高男（社会教育課係長・当時）
三上元一（社会教育課主事・当時）
金子幸弘（社会教育課主事）
- 担当者 鈴木徳雄（社会教育課主事）

発掘参加者 矢内 勲、恋河内昭彦、千装 智、徳山寿樹、木戸 剛、加納 実、大屋道則、
松本英輔

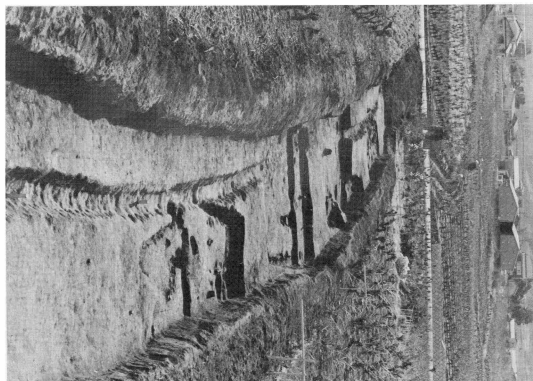
内田タケ子、大谷文子、奥原ヤエ、奥原ハツ、奥原マチ子、奥原ムラ、倉野内栄子
倉野内晴美、倉野内富美子、小林ツル子、小林八重子、清水カズ江、杉山茂文、
中村福江、広瀬文子、藤野林二、森本美知江、森本くに子、森本次子、山田シズ江

版 図



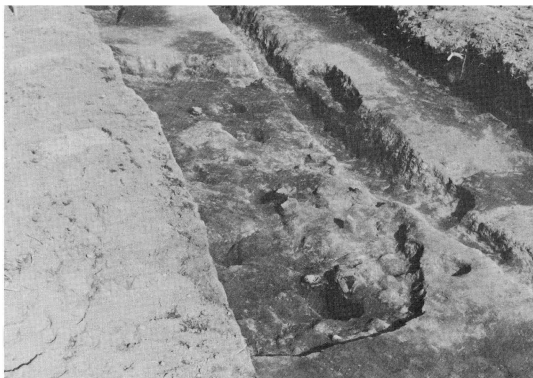


1. 真鏡寺後遺跡 北東側調査区全景 南西より

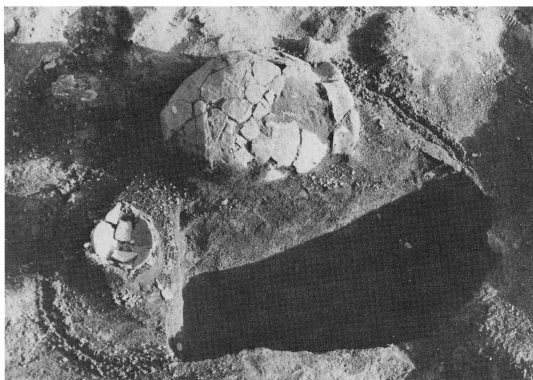


2. 真鏡寺後遺跡 南西側調査区全景 北東より

図版 2



1. 真鏡寺後遺跡 第1号住居址 西より



2. 真鏡寺後遺跡 第1号住居址 貯蔵穴



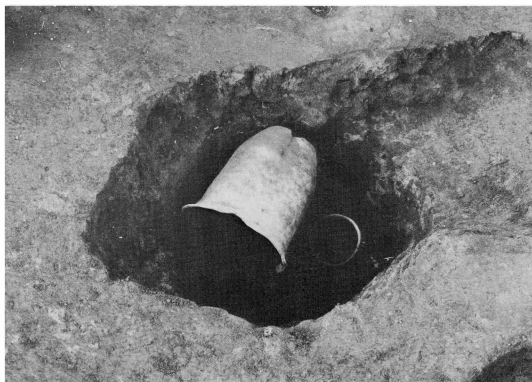
1. 真鏡寺後遺跡 第2a・b号住居址



2. 真鏡寺後遺跡 第2a号住居址遺物出土状態



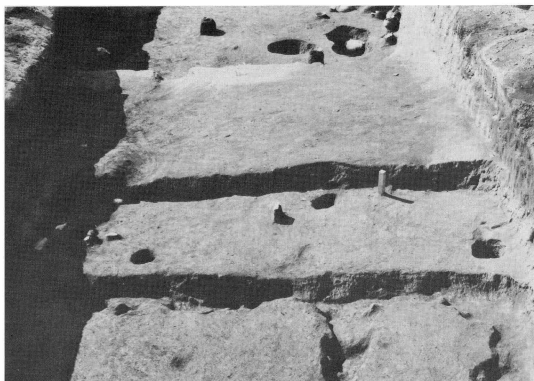
1. 真鏡寺後遺跡 第2a住居址遺物出土状態



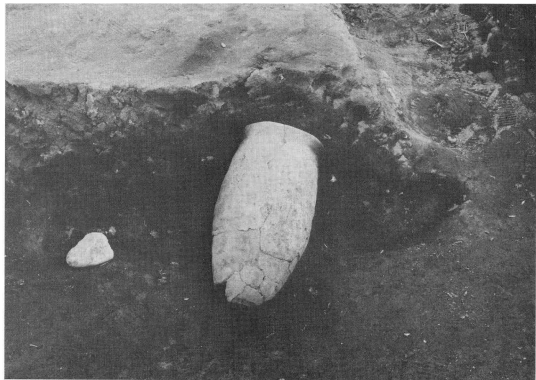
2. 真鏡寺後遺跡 第2a住居址 貯蔵穴



1. 真鏡寺後遺跡 第3a・b・c号住居址 北西より



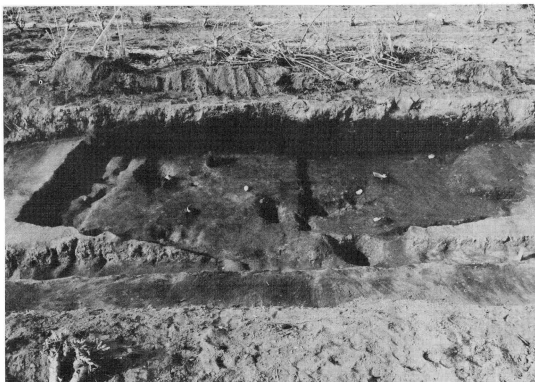
2. 真鏡寺後遺跡 奥から第2a、3c、3b号住居址 北東より



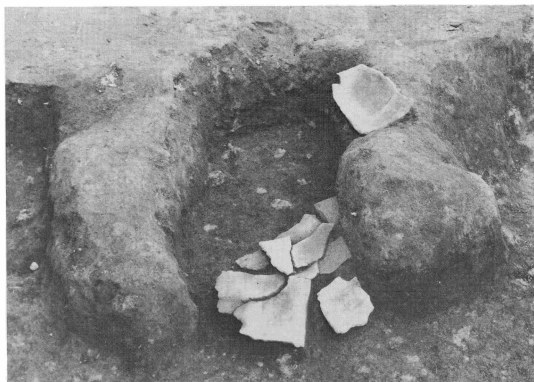
1. 真鏡寺後遺跡 第3b住居址遺物出土状態



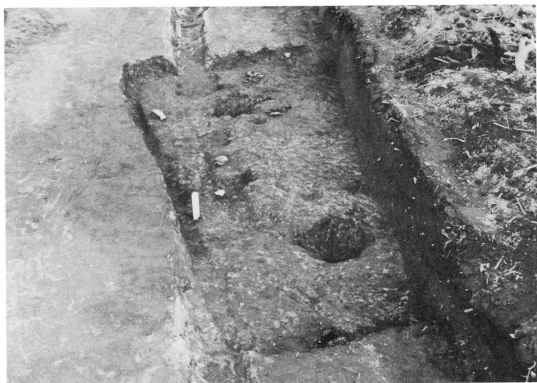
2. 真鏡寺後遺跡 第3b住居址遺物出土状態



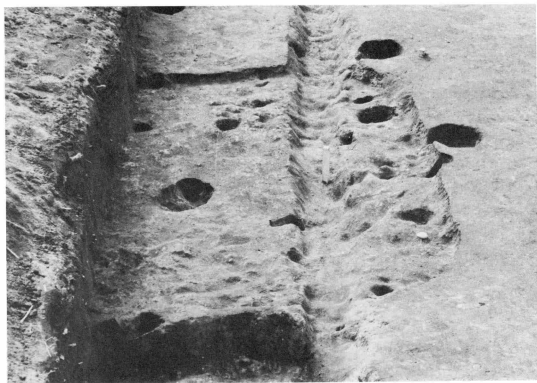
1. 真鏡寺後遺跡 第4a・b号住居址 東南より



2. 真鏡寺後遺跡 第4a号住居址 カマド



1. 真鏡寺後遺跡 第5a号住居址 西より



2. 真鏡寺後遺跡 第5b号住居址 北東より



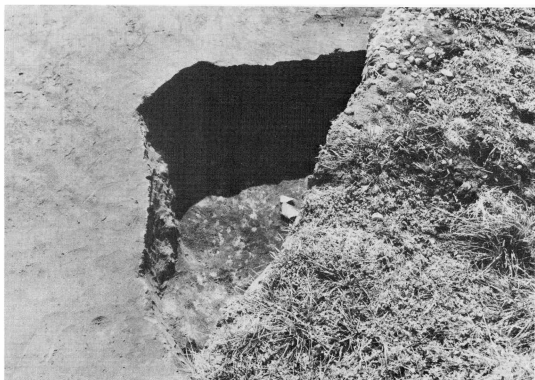
1. 真鏡寺後遺跡 第6a・b号住居址 南西より



2. 真鏡寺後遺跡 第6a号住居址 カマド



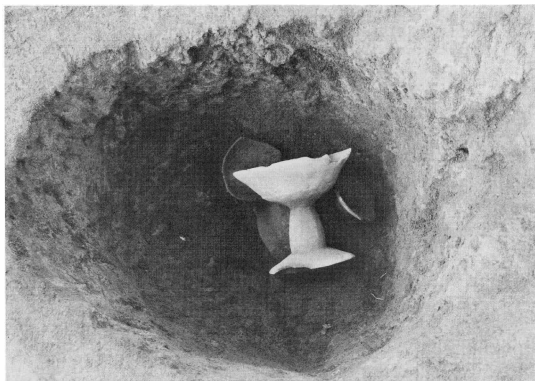
1. 真鏡寺後遺跡 調査風景



2. 真鏡寺後遺跡 第7号住居址 北東より



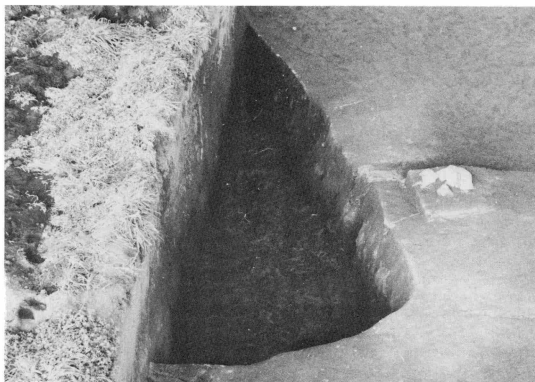
1. 真鏡寺後遺跡 第8号住居址 北東より



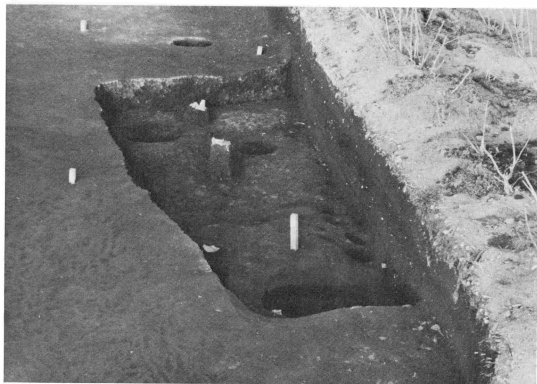
2. 真鏡寺後遺跡 第8号住居址 貯蔵穴



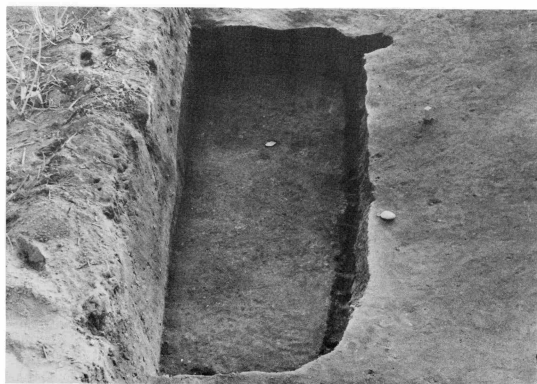
1. 真鏡寺後遺跡 第9号住居址 北東より



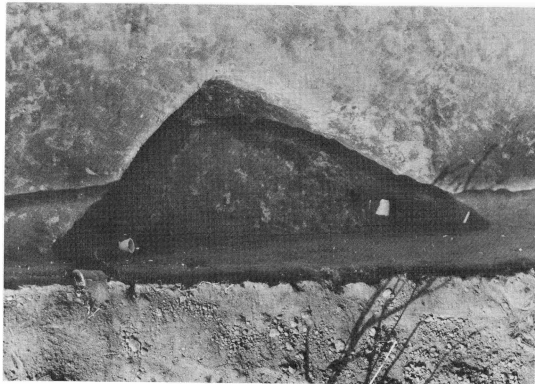
2. 真鏡寺後遺跡 第10号住居址 南西より



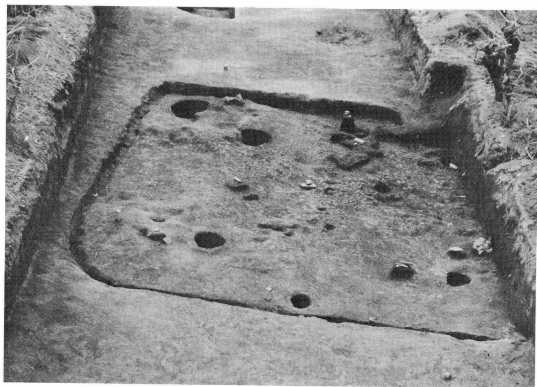
1. 真鏡寺後遺跡 第11号住居址 西より



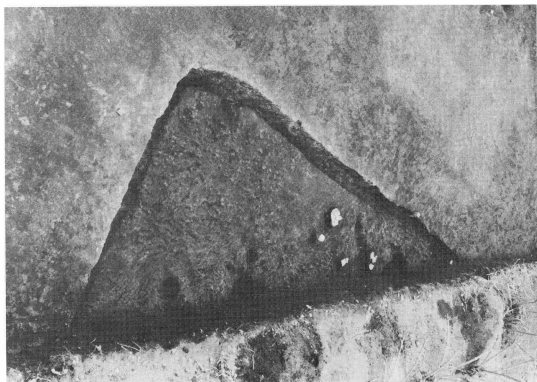
2. 真鏡寺後遺跡 第12号住居址 北東より



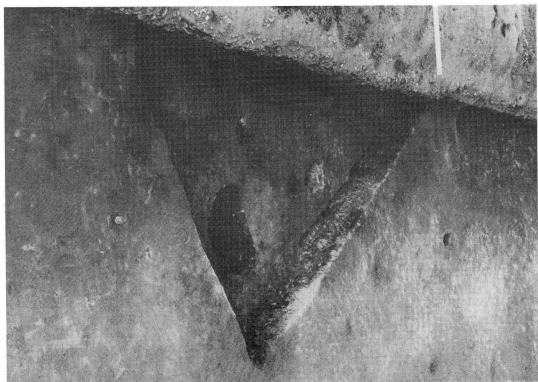
1. 真鏡寺後遺跡 第13号住居址 東南より



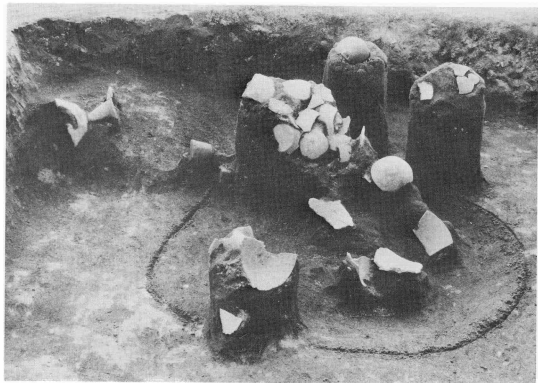
2. 真鏡寺後遺跡 第14号住居址 北東より



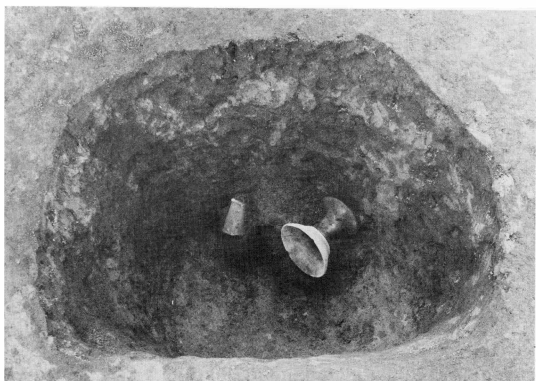
1. 真鏡寺後遺跡 第15号住居址 南西より



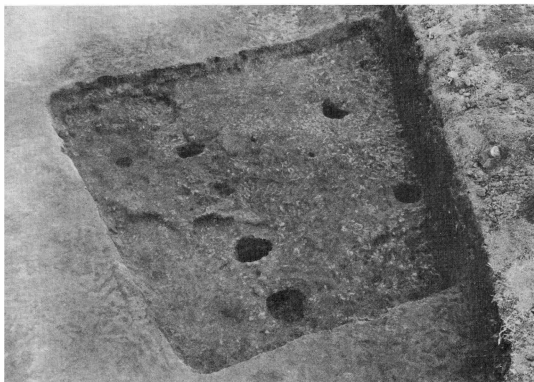
2. 真鏡寺後遺跡 第16号住居址 南西より



1. 真鏡寺後遺跡 第16号住居址遺物出土状態



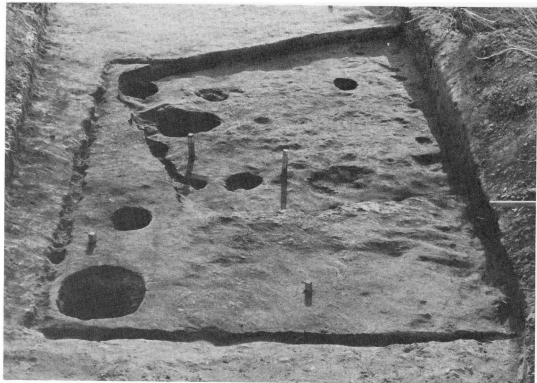
2. 真鏡寺後遺跡 第16号住居址 貯藏穴



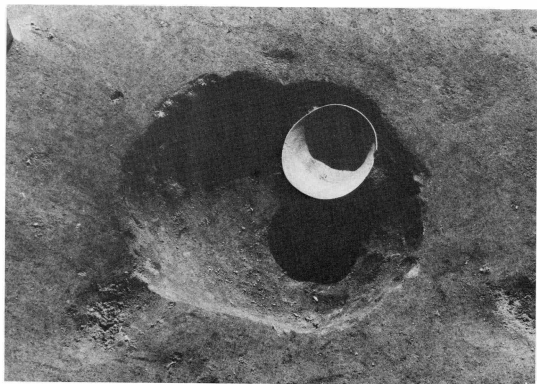
1. 真鏡寺後遺跡 第17号住居址 西より



2. 真鏡寺後遺跡 第18号住居址 南西より



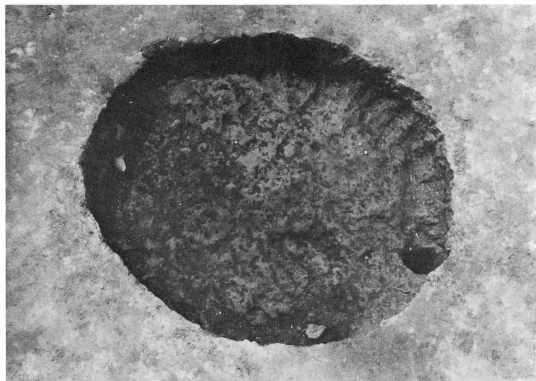
1. 真鏡寺後遺跡 第19a・b号住号址 北東より



2. 真鏡寺後遺跡 SK-10 北東より



1. 真鏡寺後遺跡 SK-22 北東より



2. 真鏡寺後遺跡 SK-25 北東より

児玉町文化財調査報告書第7集

真鏡寺後遺跡Ⅰ

児玉町内遺跡群埋蔵文化財保存事業に伴う調査報告書

昭和62年3月22日印刷

昭和62年3月31日発行

発行者 児玉町教育委員会

埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社

埼玉県深谷市東大沼356